

●国際連合大学 2016-2017 年国際教育交流事業●

韓国政府日本教職員招へいプログラム

実施報告書

ソウル・忠清北道/大邱・仁川

2017 年 7 月 11 日(火) — 7 月 17 日(月)

国 際 連 合 大 学 (UNU)
公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター (ACCU)

●国際連合大学 2016-2017 年国際教育交流事業●

韓国政府日本教職員招へいプログラム

実施報告書

ソウル・忠清北道/大邱・仁川

2017 年 7 月 11 日(火) — 7 月 17 日(月)

国 際 連 合 大 学 (UNU)
公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター (ACCU)

はじめに

国際連合大学(UNU:United Nations University)は、アジア太平洋地域の教職員や教育分野の専門家等の資質の向上と相互理解の促進を目的として、2002 年より日本政府の拠出金をもとに「日本国際教育交流プロジェクト」を実施してきました。国際連合大学はこの一環として、交流事業を公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター(ACCU:Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO)へ委託し、広く展開しています。

2002 年から始まった「国際教育交流事業」では韓国教職員の招へいプログラムを実施しており、これまでに延べ 1,995 名の韓国教職員を日本に招へいしてきました。

翌 2003 年からは上記プログラムと対をなすものとして、毎年 10 名程度の日本教職員を韓国へ派遣してきました。これら交流事業の成果が韓国政府に高く評価され、2005 年からは韓国政府と韓国ユネスコ国内委員会による招へいプログラムとして、参加人数を 20 名へ倍増し日韓教職員相互交流が実施されました。2008 年のプログラムからは、招へい人数をさらに倍増し、さらなる交流の発展を目指すこととなりました。

本年度の「韓国政府日本教職員招へいプログラム」では、2017 年 1 月に韓国の教職員の受け入れにご協力いただいた自治体や学校の教職員および 2018 年 1 月に受け入れていただく予定の自治体や学校の教職員と、公募により選抜された教職員が参加し、ソウル、忠清北道(チュンチョンブクト)、大邱(テグ)での学校および教育文化施設等の訪問を通して、韓国における教育の現状と課題、訪問都市の教育の特徴、及び両国における教育課題の共通点と相違点について学ぶとともに、韓国の教職員、児童生徒との交流を図ることができました。

このたびの訪問が、韓国の教育や文化に対する参加教職員の理解を深めることはもとより、帰国後の諸活動を通じて日韓の教職員間、学校間の交流のいっそうの発展に役立つよう願ってやみません。

最後に、このプログラムにご支援とご協力をいただきました、韓国ユネスコ国内委員会、韓国教育部、文部科学省、及び忠清北道教育庁、大邱広域市教育庁、訪問先の学校をはじめ、関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

2017 年 9 月

国際連合大学
公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター

目 次

1. 実施概要	1
2. 教育関連機関	3
3. 学校訪問	7
4. 文化体験	15
5. 成果・今後の活動	
A グループ	19
B グループ	27
随行者のコメント	35
付録 1. 実施要項	37
2. 日程表	40
3. 参加者リスト	43
4. 関係連絡先	45
5. プログラム実績	47

1. 実施概要

韓国政府日本教職員招へいプログラムは、**2000**年度から実施されている韓国教職員招へいプログラムと対応するプログラムで、**2003**年から日本の教職員を韓国へ派遣してきた。これらの交流事業の成果が韓国政府に評価され、**2005**年からは参加人数を倍増し、韓国政府と韓国ユネスコ国内委員会による招へいプログラムとして実施されることとなった。**2007**年には、文龍麟（ムン・ヨンリン）元韓国教育部長官からの招請により、中曽根弘文元文部大臣を団長として日本教職員**29**名が韓国を訪問した。**2016**年までに延**567**名の教職員を韓国に派遣し、両国の教職員の交流を深め、日韓両国間の相互理解と促進に貢献してきた。

今回の韓国政府日本教職員招へいプログラムでは、日本の教職員等**49**名が**2017**年**7**月**11**日から**7**月**17**日の**7**日間にわたり韓国を訪問した。訪問団の構成は、参加者として、1) **2017**年**1**月に国際教育交流事業のもと、日本を訪問した韓国教職員を受け入れた教育委員会より推薦された教職員、2) 同年訪問した東京近郊の学校の教職員、3) **2018**年**1**月に韓国教職員の受け入れにご協力いただく教育委員会より推薦された教職員、4) 公募により選抜された教職員の計**44**名および、国際連合大学、文部科学省、ユネスコ・アジア文化センターの同行者を含めた**49**名である。訪問団の団長は、九州国際大学現代ビジネス学部国際社会学科の太田かおり教授であった。

プログラムの約**1**ヶ月前である**6**月**10**日、TKP品川カンファレンスセンターで、事前オリエンテーションが実施された。国際連合大学サステナビリティ高等研究所の古田知美事務局長、ACCUの進藤由美部長のあいさつの後、文部科学省生涯学習政策局参事官付外国調査係の松本麻人氏より「韓国の教育事情」と題した講義が

あり、現状や課題について具体的な説明を受けた。続いて、ACCU職員がファシリテーターを務め、アイスブレイクを兼ねたアクティビティーを実施した。このアクティビティーでは、自分や自身の学校の教育活動について発信し合うことで、全国から集まった参加者の距離が縮まった。また、アクティビティーを通して基本的な韓国語のあいさつ表現を身につけた。次に、**2015**年**8**月に本プログラムに参加した東京都立石神井特別支援学校の町田直美主任教諭の発表があり、訪韓中やその後の交流について話を聞き、また今年度の訪韓団員に激励のメッセージが送られた。休憩を挟み、事務連絡、参加者による打合せ、訪韓中に披露する出しものの練習時間が設けられた。オリエンテーション終了後には、同会場別室で懇親会が行われた。懇親会は、文部科学省初等中等教育局初等中等教育企画課地方教育行政専門官である久芳全晴氏のあいさつで幕を開けた。太田かおり団長の乾杯の発声で懇談がはじまり、参加者は楽しいひとときを過ごした。この懇親会には、オリエンテーションで事例発表を行った町田氏のほか、**5**名の過去参加者が出席したが、懇親会が終盤に差しかかると過去参加者より今年度の参加者にアドバイスとメッセージが贈られた。過去参加者からの言葉を受け、**1**ヶ月後の訪韓プログラムに対する期待が一層膨らむ中、懇親会は幕を閉じた。

訪問団一行は**7**月**10**日、成田ビューホテルに前泊し、翌**11**日成田国際空港から出発した。同日昼頃に仁川国際空港に到着した一行は、空港近郊で昼食をとり、ソウルへと向かった。宿泊先でもある世宗ホテルにて韓国ユネスコ国内委員会（KNCU）による現地オリエンテーションが実施された。続いて、ユネスコスクールの活動事例紹介や韓国の教育についての講義があり、両国の教育事情の相違点、共通点について理解を深めた。その後、同ホテルにて歓迎晩餐会が開催された。「韓国教職員招へいプログラム」に参加した韓国教職員も多く出席し、終始友好的な雰囲気であった。

翌**12**日、Aグループは、ソウル市内のユネスコスクールである安川（アンチョン）小学校を、Bグループは、同じくユネスコスクールの善一（ソンイル）女子中学校を訪問した。

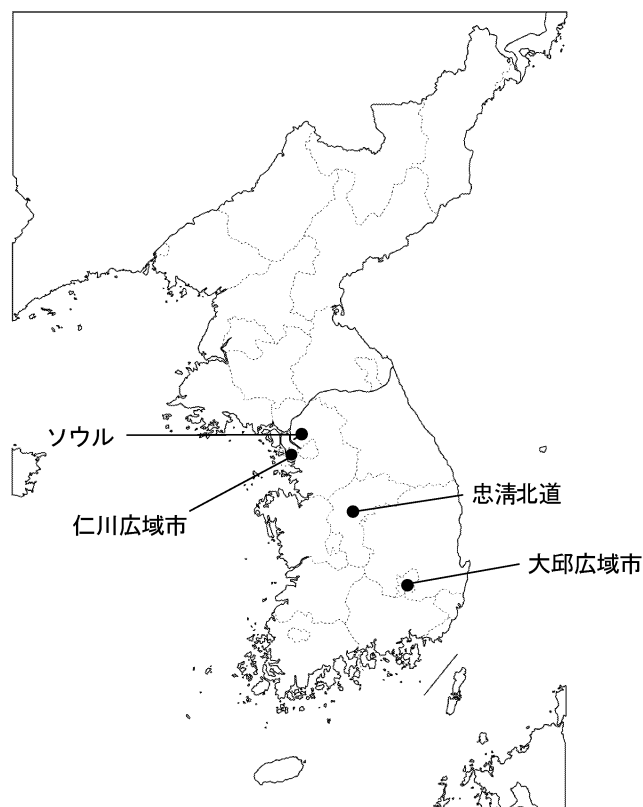
13日から**15**日までの**3**日間はA、B二つのグループに分かれ、Aグループは忠清北道（チュンチョンプクト）清州（チョンジュ）市を、Bグループは、大邱（テグ）広域市を訪問し、各地域で教育機関・学校訪問や文化施設見学を行った。

13日、Aグループは、忠清北道への道中で世界遺産である水原華城を見学した。同日午後、一行は忠清北道教育庁を表敬訪問した。夕方からは歓迎晩餐会が行われ、忠清北道教育庁の歓迎を受けた。14日は陽青（ヤンチョン）中学校を、午後はユネスコスクールである陽青（ヤンチョン）高等学校を訪問した。15日は午前中に金属活字伝授館と清州古印刷博物館を見学し、その後、報告会に向けて日本教職員同士で話し合いの時間を持った。同日夕方、ホームビジットがありホストファミリーとの交流がなされた。また、16日、報告会場のある仁川広域市に向かう途中、隆陵・健陵に立ち寄った。

一方、Bグループは13日、ソウルから大邱広域市に移動し、同日午後、大邱広域市教育庁を表敬訪問した。夕方からは歓迎晩餐会が行われ、大邱広域市教育庁の歓迎を受けた。14日は午前中に源花（ウォンファ）女子高等学校を、午後は世明（セミョン）高校を訪問した。15日の午前には桐華寺を訪問し、午後は日本教職員同士での話し合いの場が設けられ、様々な意見を交わした。同日の夕方からはホームビジットが行われ、ホストファミリーと有意義な時間を過ごした。

16日、A、B両グループ共に仁川広域市へと移動した。同日の宿泊先であるハーバーパークホテルに到着後、同ホテルにて報告会および閉会式が行われた。

7月17日、一行は帰港先ごとに成田国際空港、関西国際空港、福岡空港に向け、帰国の途に着いた。



2. 教育関連機関

韓国ユネスコ国内委員会 (KNCU)
忠清北道教育庁
大邱広域市教育庁

韓国ユネスコ国内委員会(KNCU)

訪問日：7月11日

記録：大和田 智子・高橋 和希

ソウルに到着した訪問団は、宿泊先である世宗ホテル3階ライラックホールにて、韓国ユネスコ国内委員会(以下、KNCU)によるオリエンテーションを受けた。その後、忠清北道チョンミン学生教育院のユ・チョル元院長より韓国の ASP Net(ユネスコスクールネットワーク)紹介、韓国教育開発院グローバル開発協力研究室のユン・ジョンヒョク室長より韓国の教育についての講義を受けた。また、同日、同ホテル3階世宗ホールにて開会式および歓迎晩餐会が行われた。

<オリエンテーション>

KNCU ユネスコスクールチーム長のソン・ジョンジン氏のあいさつのあと、同チームのイム・シヨン氏よりプログラムの概要と注意事項などについて、きめ細やかな案内があった。これから始まる充実した内容のプログラムに、訪問団員は心を躍らせた。

<講義：韓国の ASPNet 紹介>

忠清北道チョンミン学生教育院のユ・チョル元院長による韓国の ASPnet(ユネスコスクールネットワーク)の紹介では、以下のような説明があった。

韓国にはユネスコスクールが約600校ある。学校教育課程に連携するユネスコスクール活動について、年間の教育計画に組み入れ、教科教育及び創意的な体験活動を行っている。実践例として、農山村の小規模ユネスコスクールである小学校における地域のユネスコネットワークを活用した取り組みや、小中高の5校が連携し、児童生徒だけでなく教師、保護者、地域の人材も参加して活動している事例が挙げられる。

創意的な体験学習として、部活動を活発に展開する学校もある。ある高等学校では、50のクラブがあり、

「ユネスコデー」を設け、テーマを決めて活動を行うという。高等学校においては、大学受験を目前に控えて、ユネスコ活動を行うことが難しいが、全校を挙げて活動をしている学校もある。

教育庁と連携するユネスコスクール地域協議会活動としては、活動ケーススタディ及び協議等の研修を毎年行っている。

関係機関と連携するユネスコスクール活動については、地域内の教師、生徒がネットワークをつくって活発に活動しており、保護者と一緒に活動することもある。教育活動が活性化したり、異文化理解や自文化理解のきっかけになり、国際活動参加の機会も増え、保護者や地域社会の協力体制ができたり、様々な外国語教育の機会になったりと、学校教育の活性化・学校経営のPRにもなっている。

韓国における ESD については、ESD が国家教育課程に反映されるように、5年に1度課程が変わるたびに働きかけているという。教員研修については、2011年に始まったが、各教育庁がリードする学校を作って全国に広めていった。ESD の授業モジュールの開発・授業モデルの開発を継続的に行っているが、教職員が多忙なため、すぐに実践できるものをさらに多く作る必要がある。ESD の普及のため、広報活動などサポートを行っているが、それにも関わらず認知度は依然と低く、今後も認識を広める活動を行っていく。ESD は教師中心ではなく、生徒が体験中心に学ぶ活動であるため、ESD を広めるためには、現場から声をあげて実践例を進め、行政を動かしていくことが大切だろう。現場を訪問するとき、多くのことを感じ取って欲しいと述べ、講義を終えた。

<講義：韓国の教育について>

韓国教育開発院グローバル開発協力研究室のユン・ジョンヒョク室長による講義では、以下のような説明があった。

2014年4月のセウォル号沈没事件の影響を受け、「自分の子のように考えて教育しよう」という韓国教育部キム・ソング長官の考えが現在の教育に反映されている。韓国においては、私設塾にかかる費用などがあるため、貧富の差がそのまま教育格差につながっている。私設塾の費用負担を軽減するため、公教育を充実させていこうと努力している。公教育革新のため、革新学校を全国に拡大していく。児童生徒の自主性を重視し、単位制で運営するDIY型学校、進路オーダーメイド型教育の推進など、幸せな教育を

実践する改革を行っている。

大学入試制度においても、統一試験による評価のみではなく、生徒それぞれの長所を評価すること、高卒でも自分の希望が叶う、「特性化マイスター高等学校」などによる改革を行い、専門性のある学校を増やす努力をしている。また、教育の公正性を高めていくために、疎通・協力・効率性を高める教育ガバナンスの改編を推進している。

<開会式・歓迎晩餐会>

開会式では、まず、KNCU のキム・グエンホ事務総長が流暢な日本語であいさつを行い、続いて、韓国教育部より、チェ・ヨンハン国際協力官が壇上に上がり訪問団を激励した。次に、在大韓民国日本国大使館の篠田智志一等書記官が登壇し、主催および実施機関に感謝の意を表した。最後に、訪問団を代表して、訪問団長である九州国際大学の太田かおり教授が答礼を述べると共にプログラムへの期待を語った。

続いて、記念品交換が行われ、韓国教育部と日本の文部科学省、国際連合大学がそれぞれ記念品を交換した。続いて、KNCU と訪問団および ACCU がそれぞれ記念品交換を行った。2017 年 1 月に実施された「韓国教職員招へいプログラム」で団長を務めた韓国教育開発院のキム・ジェチュン院長および国際連合大学サステイナビリティ高等研究所の古田知美事務局長の乾杯の発声により、楽しい歓談の時間が始まった。歓迎晩餐会が終盤に差し掛かると、訪問団は感謝の気持ちを込めて、日本語で「ふるさと」、韓国語で「故郷の春」を披露した。また、出席していた韓国教職員からは、韓国語で「美しい世界(アルムダウン・セサン)」を披露し、感動的な雰囲気の中で歓迎晩餐会は幕を閉じた。



太田かおり団長によるあいさつ(世宗ホテル)

【参加者の感想】

大和田智子……………講義では、韓国の教育事情について、具体的な事例を挙げて説明いただき、大変分かりやすく、自分の学校の現状を考えながら聞くことができた。日本でも、子どもの貧困や経済格差が教育格差につながっていることが指摘されている。韓国の教育課題についての話を伺い、公教育が担う役割の重大さを改めて感じた。また、「自分の目で見て、自分の耳で聞いて、ありのままを理解する」という言葉が印象に残った。今まで抱いていた韓国の印象や理解していたことが少し変わっていくかもしれない。それも大いに楽しみになった。まっさらな心でしっかり感じ取り、新しい発見をたくさんして多くのお土産を持ち帰りたいと思った。(講義:韓国の教育について)

高橋和希……………盛大な開会式であり、歓迎して下さったことが大変うれしかった。この会のために、日本語で挨拶された KNCU のキム・グエンホ事務総長のあいさつをはじめ、いろいろな方が歓迎の言葉を準備してくださった。こうした韓国の方の温かい歓迎から、本プログラムがスタートできたことは大変光栄なことであった。また、両国の教職員の歌の交換も、感動を覚えた。こうした人とのつながりが、両国の持続的な発展につながると感じた。(開会式・歓迎晩餐会)

チュンチョンブクト

忠清北道教育庁 (A グループ)

訪問日: 7 月 13 日 記録: 千葉 貴幸

代表者名: キム・ビョンウ

特色: 重点的教育実践として、①みんなが幸せになる教育、②参加、疎通、協力を尊重する「学びの共同体づくり」、③学校革新、④革新型学校による公教育の充実、⑤共感力を高める文化・芸術学習への志向の 5 つを掲げている。2015 年には、基礎学力優秀教育庁また、市道教育庁評価最優秀教育庁に選ばれ、教育需要者満足度調査でも全国 1 位となった。

<表敬訪問>

忠清北道教育庁に着くと、リュ・ジュンソプ副教育官からあいさつがあった。「忠清北道は全国に 17 ある自治体の 1 つであり、『共に幸せな教育』を教育ビジョンとし、心が温かくなるような教育実践を展開している。忠清北道の中学校や高等学校を訪問する際には、

韓国の教職員や児童生徒と積極的に情報交換をしていただき、両国の教育の現状について理解を深めていただきたい」と述べられた。

続いて、太田かおり団長から答礼があり、「忠清北道における教育実践は韓国国内でも際立っており、国の教育の中核を担っていると聞いている。内外から高く評価されている教育について学ぶ機会をいただき嬉しく、本日の訪問を訪問団みんなで楽しみにしてきた。子どもたちの未来に向けた教育は世界の平和と安全にもつながるものだと思う。日韓両国の教育交流はその原動力となるはず。生活や文化に触れ、日韓の友好の絆を確かなものにしていきたい」と述べた。

その後、出席者の紹介が行われ、日本語で作成された教育紹介の動画を視聴した。「子どもたちの幸せ」をテーマに特色ある学校づくり、教育課程づくりが行われていることがわかった。忠清北道では進路教育の一環として、子どもたちに未来型学力を身に付けさせていくことに力を入れていた。放課後教育を充実させることやカフェ「ふれあいの場」を実践的に活用していくことで、特別支援学級に在籍する児童生徒も含めて1人の遅れを出さないような教育を目指している様子が動画から伝わってきた。最後に質疑応答が行われた。日本教職員から、韓国における幼・小・中の連携、障害をもつ子どもへの持続的支援、小学校における英語活動、不登校児童・生徒数の増加傾向、ESD 推進などについて質問があがった。



リュ・ジュンソプ副教育官(左)と太田団長(右)の記念品交換(忠清北道教育庁)

<地域歓迎晩餐会>

質疑応答後は場所を移動し、地域晩餐会を開催していただいた。忠清北道教育庁キムビョンウン教育長からは、韓国の教育は日本の教育をもとに学びながら発展してきたものの、教育交流の機会は少なかった。お互いに今回の機会を大切にし、日韓両国の教育発展を目指していこうという言葉を送った。

【参加者の感想】

千葉貴幸……………忠清北道教育庁の基本方針の下、「みんなで幸せになる教育」を展開させていることをビデオで紹介していただいた。「明るい学校」、「楽しい学び」、「温かい人間性」の実現に向けた五つの視点に沿って、具体的に実践の様子を示していただき大変勉強になった。また、放課後に子どもたちが参加する「放課後学校」の在り方についても、実に興味深く学ばせていただいた。地域人材を講師に招いて放課後学習を展開させることは、教職員の会議や教材研究の時間の確保につながっている。高い水準の授業を展開し、児童生徒の学力を伸ばし、自己有用感を全ての児童生徒に感じさせる教育実践が実現している中で、管理職を含めた教職員がほぼ全員 17 時には退勤できるという韓国の学校の勤務態勢は、勤務時間が世界一長いと言われる日本の教育界が目指すべきところではないかと感じた。(教育庁訪問)

佐久間みのり……………忠清北道の教育を紹介するビデオが日本語であったことに意識の高さを感じ、忠清北道教育庁が韓国の教育推進の重要な担い手であるということが分かった。ビデオの中で、「みんなで幸せになる教育」を目指し、参加・疎通・協力を尊重する「学びの共同体」づくりの推進や学校革新と革新型学校による公教育の充実化、共感力を高める文化・芸術教育への志向などの数々の施策の紹介があった。「みんなで幸せになる」、「学びの共同体」というキーワードはとても印象深く、自分自身の学級経営の指針にもなると感じた。(教育庁訪問)

デグ 大邱広域市教育庁 (B グループ) 訪問日：7 月 13 日 記録：小川 宏明

代表者名：ウ・トンキ

特色：大邱広域市教育庁は 1981 年 7 月に設置された。近年は、児童生徒が第 4 次産業革命後の社会を幸せに生きていく力を育むため、「幸せ力量教育」をスローガンに諸政策を実施している。その結果、教育部が主管する市道（都道府県に該当）教育庁評価 5 年連続 1 位、公共機関腐敗防止施策評価全国 1 位、学校給食の満足度調査全国 1 位、市道教育研修院評価 6 年連続最優秀、国民請願サービス総合評価全国 1 位など素晴らしい成果を上げている。

<表敬訪問>

まず、キム・ヨンタク教育局長をはじめとする大邱広域市教育庁の職員、源花女子高等学校・世明学校の両校長など韓国教職員の紹介、国際連合大学サステイナビリティ高等研究所の古田知美事務局長をはじめ日本側訪問団の紹介が行われた。

次に、キム・ヨンタク氏が歓迎のあいさつを行い、これまでの相互訪問プログラムの成果や大邱広域市教育庁の取り組みの成果を述べるとともに、今回のプログラムの意義を強調した。これを受けて日本側からは、古田氏が今回のプログラムへの期待と受け入れに対する感謝を述べた。

続いて、大邱広域市教育庁の活動の紹介が行われた。それによると、近年、大邱広域市教育庁は、第4次産業革命後の社会においても、生徒が自らを幸せにできる力を育むことを目的に教育行政を推進している。これを「幸せ力量教育」と称し、「幸せ認識転換教育」、「関係回復教育」、「人文素養教育」、「実践中心人性教育」、「芸術教育の活性化」、「保護者の子供教育力の強化」、「協学習習」、「未来志向教育」、「地球市民教育」の各分野で具体的な施策を実践してきた。こうした努力によって大邱の教育は韓国全体のなかで高い評価を受けるとともに、大邱の子どもの情緒的な安定性を高め、他者に対する優しさを育むという点において成果を上げている、ということであった。

説明後、質疑応答が行われた。日本教職員からは、「教育庁として取り組んでいるユネスコスクールへの支援策」、「特別支援教育の対象となる児童・生徒の増加傾向」、「第4次産業革命に備えての大邱広域市教育庁の取り組みに対する保護者の反応」、「人文素養教育・文化教育による受験勉強の時間確保への影響」、「第4次産業革命を見すえた政策推進のための教職員に対する研修」などについて、多岐に渡る質問があがった。

最後に、記念品交換、写真撮影が行われた。



表敬訪問での記念撮影(大邱広域市教育庁)

<地域歓迎晩餐会>

同日、大邱グランドホテルにおいて大邱広域市教育庁主催の歓迎晩餐会が行われた。韓国側、続いて日本側参加者の紹介の後、大邱広域市教育庁のチョ・テハン政策企画局長が歓迎のあいさつを述べた。今回の訪問において大邱の教育に直に触れ、理解を深めてもらうことを期待する旨が述べられた。日本側からは、古田氏が答礼を行い、今回の受入れに対する感謝、翌日からのプログラムへの期待などが述べられた。

源花女子高等学校のイ・ウク校長、世明学校のパク・チョルジン先生の音頭による乾杯ののち、食事をとりながら各々歓談し、親睦を深めた。

【参加者の感想】

小川宏明…………大邱広域市教育庁が未来に向けて問題意識をもち、それに備えて明確な目標を掲げて教育政策をおこなっていることがよく理解できた。またその結果、顕著な成果を上げていること、それに対する大邱の教育関係者の誇りと自負も強く感じられた。「幸せ力量教育」なるスローガンのもと、教育において必要とされる多くの分野で、目配りよく具体的な施策が実施されていたが、なかには児童生徒、保護者、さらには地域企業に負担と感じられそうなものもあった。それが通り、実施されていくところに、韓国における教育行政や学校、教師などの権威の高さのようなものを感じた。(教育庁訪問)

市橋菜津美…………大邱の教育観を知ることを通して、国や地域としての教育に取り組む姿勢を見る事ができた。韓国にとって転換期である今、教育上の課題を解決するために保護者と地域との連携をしっかりと取り、段階立てて開かれた暖かい人を育てようとしており、見習っていきたいと感じた。(教育庁訪問)

小椋ももこ…………「幸せ力量教育」について紹介していただいたことで、韓国全体で「幸せ教育」を推進している背景を知ることができた。取り組みも非常に活発であり、子どもだけでなく、保護者に対するケアや地域との協力体制の拡充が図られている。しかし、この「幸せ力量教育」のための学習範囲と手法は非常に広義的であり、一方で「詰め込み教育」の連続性を感じた。(教育庁訪問)

3. 学校訪問

A グループ

安川小学校
陽青中学校
陽青高等学校

B グループ

善一女子中学校
源花女子高等学校
世明学校(特別支援学校)

A グループと B グループに分かれ、学校訪問を行った。A グループはソウルと忠清北道にて 3 校、B グループはソウルと大邱にて 3 校を訪問し、活発に授業見学や教職員、児童生徒との交流を行った。

アンチョン

安川小学校 (A グループ)

訪問日：7 月 12 日 記録：中田 望希

代表者名：イ・チュンヒ

機関概要：特別支援学級 1 クラスを含む 17 クラス、教職員 54 名の公立小学校。教育基本方針は「学び-身につけ-分かち合い」の一連の過程をより理解し、共感し、行動する力を備えた地球市民を育成することである。社会的支援が必要な児童が全体の約 20%を占める教育福祉優先支援学校である。

学校到着後、会議室にてイ・チュンヒ校長から歓迎の言葉と学校・教職員についての紹介があった。続けて、訪問団を代表して、奈良市教育センターの吉元祐介室長が答礼を述べ、記念品交換が行われた。

その後、教育部長のイム・ジェミン先生よりパワーポイントを用いての学校紹介があった。安川小学校では、2015 年のイ・チュンヒ校長着任後、ESD に積極的に取り組んでいる。「平和と人権」をテーマとして地球市民教育を進めている。特に力を入れていることは、地球市民教育、協力人性教育、読書の 3 点である。

地球市民教育は校長・教頭を筆頭に教職員合計 10

名で協議を行う。新学期が始まる前に授業で取り組むことができるように、教育活動にどう取り入れるかを話し合う。この取り組みは教職員だけではなく、保護者に対しても学校通信等を通して、活動内容を通知している。併せて、学校で保護者を対象にした説明会も行っている。

学校紹介の後、2 グループに分かれて学校見学があった。日本とは大きく異なる点がいくつかあった。まず、校門の前と裏門の 2 カ所に保安官の駐在所があることである。さらに、学童が校内にあり、夏休み、冬休み中も利用可能とのことであった。また、カウンセリングルームには地域社会の専門家がおり、経済的に貧しい子が相談をしたり、勉強を教えてもらえる。授業参観も 2 つに分かれて行われたが、双方とも「人権と平和」をテーマに、問題意識を持たせ、子供達自身でどう対応し、考えるかの授業であった。

続いて、訪問団員による日本文化を紹介する授業が行われた。1 年 1 組ではかぶと作りと福笑い体験、1 年 2 組ではけん玉体験、1 年 3 組では折り紙と手遊び歌、2 年 1 組では折り紙と紙相撲、2 年 2 組では万華鏡づくり体験、2 年 3 組ではかるた遊び体験、韓国と日本の違いや同じところを見つけるゲーム、3 年 2 組では風呂敷の使い方体験、合計 8 クラスで文化体験の授業が行われた。

その後、授業をしたクラスで昼食をとった。メニューはビビンバ、シッケ、キョンダンであった。昼食後、教職員同士の意見交換会が行われた。日本教職員からは、「食べ物を使って授業をすることはあるのか」、「ESD の理解不足がある現状の中で、教職員も積極的に取り組んでいる秘訣は何か」、「児童サークルの活動時間について」、「ESD の研修が 21 時間あると聞いたが、他の学校でも同様なか」、「ユネスコクラブの活動について」、「英語教育について、どのように研修を行っているか」、「英語教育の成果、課題は何か」などの質問があがった。また同席した韓国児童に対しても、「この学校のすばらしいところは何か」との質問があがった。韓国児童は、「給食がおいしく、先生の授業がわかりやすいこと」と答え、会場は和やかな雰囲気に包まれた。

また、韓国教職員から日本教職員に対して、「日本の教員の男女比はどれくらいか」、「日本ではどのように児童会長を決めるのか」、「小学校の教員は全教科を教えるのか」といった質問があがった。



日本教職員による文化授業の様子(安川小学校)

【参加者の感想】

太田かおり……ESD ならびに地球市民教育の充実に力を入れており、先進的な取り組みを行っていた。校内見学では、教室内外の掲示物に立体的なものが多く、手先の器用さや創作物の立体的表現の美しさがたいへん印象的であった。これは、韓国の学校教育が力を入れている3要素(①英語教育、②IT教育、③芸術)のうち、芸術教育の成果であろうと見て取れた。「人や物をいかにより美しく見せるか」に対する美的感性教育が充実しているように感じた。

また、児童生徒の安全面に関する配慮については、入口での守衛による出入者のチェックや防犯カメラの設置など、防犯意識の高さが窺えた。また、毎朝保険室から各教室の教職員パソコンへ「PM2.5情報」が配信されており、教室の窓の開閉や屋外活動の判断などに役立っているとのことであった。学校給食の食材も、有機食材を使用するなど安全・安心を重視する取り組みが見て取れた。児童生徒の健康面や安全面への配慮が行き届いていた。

大和田智子……学校の施設の充実ぶりに驚いた。ICT関係の充実ぶりは羨ましい限りである。また、教材室が整備され、授業に必要な物がすぐに取り出せる。しかも専門の方がいて教材を管理しているとのこと。常に整頓され使いたいときにすぐ使える状態になっている。その他、教職員よりも多くの支援員がおり、教育活動の様々な場面で教職員の支援をしている。教職員の負担がかなり軽減されていると思った。日本の学級担任は何でもやらなければならない。学習指導以外の負担も大きい。支援員の配置やその役割については、教職員の負担軽減のために、大いに参考になると感じた。

日本の文化授業を1年生の学級で体験させていた。外国で、その国の子どもたちを相手に授業

ができたことは、とても貴重な機会だった。1年生であるため、言葉が分からなくても実際に動いて経験できる内容にした。子どもは素直に興味津々な様子で授業を受けていた。そのきらきら輝く瞳と笑顔、夢中になって取り組む様子は、日本も韓国も変わらないと思った。覚えての片言韓国語にも反応してくれて、給食の時に韓国語でたくさん話しかけてくれた。

陽青中学校 (A グループ)

訪問日：7月14日 記録：山方 貴順

代表者名：キム・ドンヨン

機関概要：国際空港や新興工業地区に囲まれた、発展の著しい地域で7年前に開校。楽しい学び、分かち合いと思いやりで幸せな学校がテーマである。夢・多読・読書文化活動を通じて、読書に力を入れており、読書に関する賞を多数受賞している。オーストラリアを相手国として国際交流を進められ、昨年は最優秀運営学校に選定された。

最初に、キム・ドンヨン校長より、陽青中学校の概要について、「この学校は、新興産業地域に開校して7年、11学級があり、500名の生徒、50人の教職員がいる。『楽しい学び、分かち合いと思いやりで幸せな学校』をテーマとして全ての教職員、地域が協力している。読書に力を入れており読書に関する賞を多数受賞している」との説明があった。

続いて、千葉県教育委員会教育振興部生涯学習課の菅谷忠由班長兼社会教育主事が訪問受入に対する謝辞を述べた。「学校同士、韓国と日本の未来につながるものになれば」というあいさつがあった。

そして、記念品交換が行われた。学校側から訪問団への記念品として、民画と呼ばれる伝統的な絵が描かれたうちわが贈られた。民画には、当時の農民が必要なものを描かれている。訪問団からは、ミニチュアの着物が贈られた。その後、同校のチョ・ウンスン教頭より以下のように学校紹介があった。

陽青中学校は科学団地に位置するが、ここは新興産業地区といえる。市内の80万人の人口の中で、この地域に8万人がいる。近くに国際空港や工業団地がある。夢・創意・思いやりが校訓であり、2011年に開校。した。6学級、3学年の計18学級で、男女共学だが、クラスは男女別。生徒数は512人である。「先生から生徒への愛

情を感じ、努力をしてくれる姿が目に見えるので、とても幸せだ」と生徒から評価されている。教育課程の特徴としては、「楽しく学ぶ夢」、「多読・読書活動」、「生徒の自治活動」の3点が挙げられる。8時30分から8時50分の20分間は、読書や、当日のスケジュールの確認、クラスでの話し合いなどが行われている。45分間の教科授業が、7時間目までである。スポーツ活動を促進するために、学年によって6時間や7時間目をボウリング、スクリーン野球、ジャンプ等のスポーツ活動に充てている。第1・3週目の水曜日には、授業を5時間目で終わらせて、6時間目は、自立活動が行われている。7時間目以降は、放課後活動が行われるが、金曜日のみ、クラブ活動やボランティア活動がある。クラブ活動については29の学校のクラブ、生徒が自主的に運営する11のクラブがある。授業の方向性は、生徒参加型授業。教室授業改善のために、指導方法を開発している。専門的、学習共同体運営をして、授業に役立てている。

全ての教科学習について、体験型、ブロックタイム授業を実施しており、訪問当日は、ブロックタイム授業の最終週であった。

放課後活動については、23のクラスがあり、数学探求、科学探求、バドミントン、バスケットボール、歴史能力検定、日本語、読書等を、同校所属の教職員が教えたり、外部の人材が教えたりしている。自分の表現活動を育む課程の一環として、読書を習慣づけるように、本はいつも生徒の手元に持たせている。登校する時、かばんの中に本が入っていれば、プレゼントがもらえるという制度があり、生徒はいつも本をかばんに入れている。また、盲学校と合同でキャンプを行っており、生徒が盲学校を訪ね、読書、演劇、点字や絵本の読み聞かせなどの活動を行っている。

高齢者の人生を記録するプロジェクトもある。1930年代以降、サハリンに強制移住させられた人たちが、日本政府の支援によって、韓国の各地に戻ってきたが、同校ではサハリン移住村の高齢者から話を聞く活動を行っている。その痛ましい過去の歴史を、聞き、記録し、発表する取り組みである。

給食については、エコ材料を使って、おいしい食事を用意しており、清州地域で、給食ランキング1位に選ばれた。また、生徒自治会が主催しているアラン祭という校内の催しがあり、プログラムの準備等の全ての活動を生徒たちが執り行っている。

国際交流体験活動については、昨年、オーストラリアのメルボルンに3週間の滞在し、現地の中学生と交流している。

学校紹介の後、記念写真の撮影を行い、2つのグループに分かれて、行内を見学した。玄関にある、情報を掲示するための大型モニターやWeeクラスという子どもたちがお互いに相談するクラスが印象的であった。また、玄関には読書をより励行するため、本棚を設置する予定だという。図書室では、サハリン強制移住者関連の取り組みの一環として、強制移住者の孫と同行生徒の交流会が行われていた。このほかに、ホームベース(ロッカー)や日本でいう職員室に当たる研究室、家庭科室、英語室などを見学した。視聴覚室では、歓迎ライブとして、中学1年生のバンドによるCarly Rae Jepsenの『Call Me Maybe』の演奏があった。

質疑応答の時間には、日本教職員から、「韓国の高校は、抽選で高校が決まるが、中学生の進路に対する意識について知りたい」、「クラスが男女別に分かれているがその理由は何か。また、日本では、性差別問題やLGBD問題があるが、韓国ではそういったことは問題としないのか」、「生徒の約束、保護者の約束、教職員の約束があると説明があったが、誰がそれらの約束を決めているのか」、「どのような生徒が工業専門高校に進学するのか」などといった質問があがった。

昼食は、食堂での給食体験を行った。メニューは豆ごはん、白和え、ブチトマト、味噌スープ、チキンのチリソース和えであった。食堂では、生徒も教職員も、給食を食べるという。給食を配膳する生徒や、片付けを補助する生徒もいた。



歓迎の横断幕の前で記念撮影(陽青中学校)

【参加者の感想】

山方貴順……授業を参観して印象的だったのは、小学校との違いである。小学校は、一斉授業が多く、教師の話をよく聞いていた、というイメージを持った。一方で、中学校では、訪問当日がテスト後であるという点も考慮する必要があるが、生徒達は自由に授業に取り組んで

いた。講義形式の授業は、ほとんどなかった。以上のように、児童・生徒の授業に取り組む態度が、大きく違う点が印象に残った。中学校訪問を通して非常に印象的であったのは、給食後、日本語を学んでいるという女子生徒3名と、通訳の方を交えてではあるが、フランクに会話ができたことである。K-POPや、J-POP、日本のアニメ、日本の制服、給食の話など非常に盛り上がった。

菅谷忠由……………参観した日が、期末テスト後の期間であったため、通常の授業ではなく、日本で行われている「総合的な学習の時間」にあたる授業を参観でき、生徒の学習要求に応えた工夫ある授業を見ることができたことがよかった。陽青中学校が教職員の研修時間を確保するために、教育課程を改善したり、生徒の読書への関心を高めるためにさまざまな取り組みを行ったりするなど、実態に即した学校経営を行っている姿が参考になった。

ヤンチョン

陽青高等学校 (Aグループ)

訪問日：7月14日 記録：加藤 芳恵

代表者名：キム・ウンシク

機関概要：学級数は24学級。ユネスコスクールとして先進的な取り組みを行い、エコ建築物認証や優秀施設学校に選定されている。大韓民国優良学校博覧会表彰等も受け、個々の進路に合わせたオーダーメイド教育課程の運営をしている。国家科学産業団地内に位置し、豊かな人的・物的資源の教育的活用の活性化を推進している。成長を支援する体験中心の創意体験型教育課程や反転授業を取り入れている。

到着すると、同校の教職員と大型スクリーンに映し出された「日本の教職員、本校の訪問を歓迎します」の歓迎のメッセージに迎えられた。この画面は校内の随所で見られ、廊下に情報掲示板としての大型スクリーンがあることがわかった。同校生徒の案内により講堂に入ると、同校生徒の歌とピアノ、伝統楽器ヘグムによる演奏から成る歓迎公演後、歓迎式があった。キム・ウンシク校長の歓迎のあいさつと翌日に同講堂で行われるコンサートに出演する教職員で構成されるバンドの紹介に続き、太田かおり団長が答礼を行い、「両国が結束してアジアの世界をより良く平和にしていってほしい」と述べた。また、キム・ウンシク校長、太田団長による記念品交換が行われた。

続いて行われた学校紹介では次のような説明があっ

た。学校のシンボルは松・バラであり、校訓「夢を見て、挑戦して、希望を歌う」である。また、本年度の目標は「一緒に走ろう我々の未来のために」であり、大学進学等に向けた進路指導に手厚く取り組んでいる。例えば、数学教育や日常で行う読書教育の推進、各分野の専門家を迎えての職業教育や個別テーマに即した進路指導などが活発に行われている。反転授業という授業形態も取り入れている。授業と宿題の役割を「反転」させ、授業時間外にデジタル教材等により知識習得を済ませ、教室では知識確認や生徒同士が協力して問題解決学習を行い、教師はその助言に携わる授業形態である。参加と協力中心の授業革新となっている。

その後、同校校長、教務部長、教頭の案内のもと、3グループに分かれ、学校施設見学と授業参観をした。職員室や生徒の作品を展示してあるホームページ、制服リサイクル室、屋上庭園、冷暖房完備の体育館の案内説明があった。その際も、生徒の進路に合わせた授業や職業相談の様子などが見受けられた。また、教科担任制を生かした教室や職員の研究室は、環境が整備されており十分な情報を生徒に提示することができる。日本語の授業では、スクリーンに「おたんじょうびおめでとう」で始まる模擬会話のビデオが流れていた。画面下部には、日本語字幕が表示されており、実際の会話で使える内容を扱っていた。音楽の授業では、リコーダーやバイオリン、フルートなど、自分の演奏できるさまざまな楽器を持ち寄り演奏をしていた。服装も、学校指定のTシャツやジャージ制服など、個人の判断に任されているようだった。講義が中心の教室では、居眠り防止用の立って使う背の高い机を使っている生徒もいた。

続いて、同校教頭の司会進行のもと、交流懇談会が行われた。質疑応答では、反転授業や進路対応、第二外国語の学習など沢山の話題が上がった。

最後に玄関前で記念撮影をし、訪問を終えた。



現地の教職員の方との交流懇談会(陽青高等学校)

【参加者の感想】

加藤芳恵…………生徒が歓迎の演奏をし、地域の教職員から成るバンドがコンサートに参加していた。生徒の作品をギャラリーに展示するなど、日本でいう文化祭が日常に取り込まれている。教職員や生徒だけでなく、家族も一緒に楽しんでおり、地域での娯楽を提供する役割も果たしていた。学校生活全般は、周りの目を気にすることなく、自由に自分のできる範囲で自信を持って、一人ひとりが活動している様子であった。また、日々の読書教育や芸術プログラムを通して、人格を育てることも大切にしている。Wee クラスという、不登校生徒をサポートする制度が中高を通じてあり、どの生徒にも学校での居場所が確保されている。教室は彩り良く明るい雰囲気であった。個々の教職員が教室を持っており自由にアレンジできるためである。教材や機器が設置され、教科情報を生徒に示す場にもなっている。日本でも、各教室設置のPCと大型スクリーンで、手軽に情報を検索でき映像を見る環境をつくることは、情報格差を起こさないために、必須であると感じた。

水野愛実…………生徒主体の学校作り、自分の夢を早期発見し叶えられる環境作りが魅力的であった。また、1番印象に残っているのが、反転授業。現在、勤務している自治体での大きな課題で、先生と生徒とのコミュニケーションが積極的にできる授業作りが素晴らしく活用していきたいと思う。

ソニール

善一女子中学校 (B グループ)

訪問日：7月12日 記録：吉川 守

代表者名：ヤン・スンハ

特色：27 クラス、教職員 55 名の私立女子校。教育目標は、知性・感性・品性を育む人文・芸術・体育教育を合わせた融合教育。「幸せな生徒」という教育目標を掲げ、潜在力と可能性を育成するサークル、自由学期制の進路プログラム、自己啓発プログラムなどを実施し、教科授業との連携のうえ教育活動を進めている。学校内を行政業務担当教師と担任教師に分け、担任教師が学生指導と授業準備に十全を尽くせるようにしている。

学校に到着し、校舎までの急な坂道を登ると、「ようこそ善一女子中学校へ」と日本語で書かれた横断幕を持った多くの生徒達が笑顔で出迎えてくれた。

歓迎式が行われる調理室へ移動し、学校紹介ビデオ

の鑑賞をした。「3 年生による進路発表会」、「合唱コンクール」、「ミュージカルクラブの発表」などの生徒の自立活動、クラシック、オーケストラなどさまざまな文化を体験している様子や、災害学習として、消防庁との連携や応急処置の研修の様子などの内容であった。

その後、ヤン・スンハ校長先生からあいさつがあり、「学校は、教育的価値についてバランスよく指導する場所であり、現在、期末テストが終わり自己開発プログラムの授業に取り組んでいる。今回の日本教職員による訪問を通じて両国の友情を再確認したい」という内容であった。

続いて、記念品の交換が行われ、訪問団を代表して、奈良市立若草中学校の平尾京一教頭が答礼を行い、「韓国の教育の良いところを日本に持って帰りたい」と述べ歓迎会は終了した。

その後、講堂へ移動し3年生の進路発表会を見学した。ステージ上では、将来、外交官を目指す生徒が、「なぜ外交官になりたいのか」とパワーポイントを用いて説明をしていた。

次に、校舎見学を行った。最初に、スピニングクラブ（音楽に合わせてエアロバイクを漕ぐ有酸素運動）が活動している教室を見学した。教室の壁の一部が鏡張りになっており、天井にはミラーボールが設置され、約 40 台のエアロバイクが並べられていた。教室では韓国で流行しているポップな音楽が大音量で流され、その音楽に合わせて生徒たちは時々かけ声をかけながらリズムよくエアロバイクを漕いでいた。また、教室の後ろでは、エアロバイクに乗っていない生徒たちがリズムに合わせて踊っていた。この授業の目的は、体力向上の他にエネルギー節減にも一翼を担っており、ESD の取組みの一環でもあるとのことである。スピニングについては、生徒たちの勧めもあり訪問団員も挑戦し汗を流した。

その後、訪問団は2つに分かれ、各教室、英語ルーム、相談ルームなどを見学した。相談ルームでは、相談員から生徒たちの利用状況について説明があり「家庭や友人関係について」の相談が最も多いとのことであった。友人関係についての相談は、「友達のつくり方がわからない」といった内容が最も多く、相談内容について全教職員で共有することはなく、担任とだけは共有するとのことであった。

続いて、1年生の各クラス(9クラス)において、訪問団員が日本文化についての授業を行った。1組では音楽活動、2組では日本の食、住文化、3組では日本各地のお祭り、4組では美術活動、5組では日本の伝統的な踊り、日本の伝統的な遊び、7組では体育活動、8組では日本の学校の紹介、9組ではふるさとをテーマにした授

業を行った。

その後、食堂へ移動した一行は、全校生徒が一斉に昼食がとれる巨大な食堂で、生徒達と一緒に昼食を食べた。昼食後、調理室に移動し、ユネスコクラブの生徒と一緒に、料理研究家のパク・シオン先生の指導により、韓国の伝統のお菓子「菓食」を作った。

続いて、同校教頭から同校の教育についての次のように説明があった。善一女子中学校の教育目標は「幸せ教育」である。「幸せ教育」とは、生徒が幸せであれば先生も幸せ、またその逆もありきである。幸せのために自分が望んだことをするのがよいと考え、本校では教育課程を組むとき、生徒たちにアンケートを実施し、生徒たちの意見を参考にカリキュラムを編成している。また、1年生から生徒の素質や才能を見つける為に自由学期制度を実施している。

そして、ユネスコサークルについてのビデオを鑑賞した。ソウルにある日本人学校と交流している映像などが含まれていた。質疑応答の時間には、ユネスコサークルの活動などについて様々な質問があがった。

最後に、教頭からお別れの言葉として、「善一女子中学校は今年 50 周年を迎える大事な年である。日本の先生方による文化交流授業では、徳橋教諭の伝統的な踊りの授業を見学させていただいたが、非常に情熱的であった。韓国で素敵な思い出をつくっていただきたい」とあいさつがあった。



韓国料理作り体験(善一女子高等学校)

【参加者の感想】

吉川守……………韓国の生徒の授業に対する積極的な姿勢に驚いた。3年生の進路学習を見学した際、ステージ上で1人の生徒が自分の夢についてパワーポイントを用いて話をしていた。その姿は堂々としており、明確なビジョンを持っていることが伝わってきた。また、話を聞く生徒達の姿も素晴らしく、話を聞かなければならない時

は静かに聞き、反応をする場面ではしっかりと返事をし、300名ほどの生徒が一体となり、進路学習発表会を作り上げていた。また、施設面では講堂や体育館、調理室、食堂などの施設が充実しており、生徒たちが生き生きと活動できるように整備されていた。最後に、ユネスコサークルの代表生徒が、我々の突然の質問に答える場面があった。突然の質問にも動じることなく、明確で分かりやすい回答をしたことには驚いた。

小椋ももこ……………善一女子中学校では、自由学期制の一環として、生徒が教室内の机を動かしダンスの練習をするなど、学びが主体的であり、クラスの中が躍動しているのが印象的であった。農業科の必修科目である課題研究では、問題解決能力や自発的、創造的な学習態度を育てることを目的としており、生徒の主体性や思考力・表現力を身につけさせるのに、自由学期制の身近な興味関心の引き出し方など大変参考になった。

ウオンファ

源花女子高等学校 (B グループ)

訪問日：7月14日 記録：黒岩 ゆい

代表者名：イ・ウク

概要：1953年、「国を愛し、民族を愛する」という建学の理念のもとに開校し、現在45学級、約1400名の生徒が在籍している大邱最大の私立女子高等学校。教育目標は、「21世紀、国の未来を導く須直・有能・創造的な人材の育成」である。科学重点学校としての「無限想像教室」や、国際理解教育の重点校としての国際交流を実施している。

訪問団を乗せたバスが到着すると、出迎えたのは色とりどりのチマチョゴリを着た生徒と教職員たちだった。さらに驚くことに、バスを降りると盛大な歓声とともに校舎の窓から手を振る生徒たちが見えた。

「こんにちは!」、「おはようございます!」などと飛び交う日本語と拍手に圧倒されながら校舎へ案内されると、今度は吹奏楽部と合唱部による歌のプレゼント。熱烈的歓迎と心温まる演奏に訪問団員一同、一瞬で心を奪われた。その後、案内された教室にて、イ・ウク校長のあいさつ、学校説明があった。続いて、訪問団を代表して奈良市教育委員会の吉川守指導主事が答礼を行い、訪韓の目的などを述べた。記念品贈呈後、日本語で作成された学校紹介の映像が流れ、源花女子高等学校の歴史、学校行事や国際交

流を始めとするESDの活動例などについて知ることができた。次に、2つのグループに分かれて学校施設案内と授業見学をした。まず案内されたのは体育の授業が行われていた体育館である。野球、テニス、バスケットボールなどの道具やユニフォームなどが揃えられ、入り口には多くのトロフィーが並べられていた。次に、日本語の授業を見学した。テーマは「数字」と「名刺交換」。リズムに合わせて数字を数えたり、日本の数字に関する問題（例えば日本人の平均寿命はいくつ？等）を出したりするなど、終始授業を楽しむ生徒の様子が見られた。その後も世界中の国の曲を紹介する音楽の授業や、韓国の伝統的な絵や文字を扇子に描く美術の授業を参観した。最後の美術の授業では、完成した扇子を生徒たちからプレゼントされ、早速その扇子で仰ぐ訪問団員の笑顔が輝いていた。

源花女子高等学校の教職員の方々との昼食を楽しんだ後、日韓教職員懇談会が開かれた。訪問団からの質問がいくつかあがり、同校の担当教諭が回答した。日本教職員からは、「地域と連携して行なっている環境保全活動や他のユネスコスクールとの連携について具体的に知りたい」、「地域の人を巻き込む秘訣は何か」、「防災教育や災害教育に関して、2014年のセウォル号事件後、学校現場でどのような変化があったか。またどのような活動を行っているか」、「韓国では、精神的な問題により退学する生徒がいるか」といった多岐にわたる質問があがった。

懇親会が終わると、1階のロビーにある展示スペースに案内された。そこには源花女子高等学校で行なわれているユネスコ活動について写真と共に紹介されたパネルがあった。国際交流を始めとしたさまざまな活動を積極的に行っている様子が伺えた。名残惜しい雰囲気の中、源花女子高等学校の教職員の方々に見送られながら学校を後にした。



生徒との交流を楽しむ訪問団員(源花女子高等学校)

【参加者の感想】

高橋和希……………音楽や美術、国語の授業を参観した。例えば、音楽の授業では、世界を順番に訪れていくという想定で、世界の曲を順番に演奏していった。学習している内容を世界や実社会とつなげながら進めていた。また、地球村消灯行事や地域の河川の浄化活動等、地域と共に活動していた。世界、地域などの実社会とつながって生きることは、これから求められることである。世界や地域との関わりながらどう生きていくかを考えさせる教育を実践していた。

友光里恵……………見学した授業の中で、国際的な視点、自国の文化を尊重する思いを、ESDの視点を踏まえ、それぞれの生徒の個性や考えを引き出しながら、そして、生徒自身が思い切って自己表現している生徒の姿を見ることができた。周囲の生徒と切磋琢磨しながら、活動をしている姿にこれから日本の教育で求められる「対話的・主体的な深い学び」を通し、育てていきたい生徒象であると感じた。

世明学校 (Bグループ)

訪問日：7月14日 記録：高畑 啓一

代表者名：パク・チョルジン

概要：2014年9月1日、知的障がい者を対象とした特別支援学校として開校。夢、希望、幸福を育てる「韓国の教育の首都」と呼ばれる大邱の教育目標を達成するため「夢+コミュニケーション+自立=世明幸福教育」を教育目標に決め、安全かつ幸せな学校づくりに最善を尽くしている。また、学校経営重点として、①安全かつ快適な教育環境づくり、②生徒の幸せを考慮した特色ある教育課程の運営、③自己実現及び社会統合のための進路・職業教育の強化、④参加とコミュニケーションを通じた信用できる幸せな教育共同体の4点を掲げている。

世明学校に到着すると、初めに歓迎会及び学校紹介が行われた。芸術授業、バザーの販売、製菓の職業訓練などの学校における活動がまとめられた、自由学期制度や教育活動についての学校紹介ビデオの上映後、同校のパク・チョルジン校長により、来賓者・出席者の紹介、歓迎のあいさつ及び学校紹介があった。続いて、訪問団を代表して千葉県立桜が丘特別支援学校の森裕紀子教諭が答礼を述べた。そして、パク・チョルジン校長と森教諭による記念品交換が行われた。

続いて、2グループに分かれ、学校施設及び中高生の授業参観が行われた。幼稚園や小学校低学年が利用し、信号や乗り物について学ぶ、「ミニ交通ランド」や、転んだり、跳んだりすることができる「感覚運動室」、また、生徒がリラックスできるようになっている「心理安定室」を見学した。

授業参観では、中学生・高校生の音楽・美術・レクリエーション・国語・社会・情報・体育を見学した。また、センター棟と呼ばれる建物には、体育館、バリスタ教育で使用するコーヒーショップ、パンやお菓子を作る製菓実習室、炊事や掃除の仕方など日常生活の訓練をする場である日常生活訓練室や、床の高さを調節することもできる温水プールなどの設備が整っていた。

見学後、懇談会が行われた。懇談会では、両国教職員による意見交換、質疑応答が行われた。日本教職員からは、「教育においてどこに力を入れているか」、「韓国における、障がいをもった子どもたちへの差別や偏見の現状とその対策、また、発達障がい疑われる生徒が増えてきている中で、保護者にどのように対応しているのか」、「教室不足などへの対応について」、「定期的に特別支援学校と普通学校との交流が行われているのか」、「障がいをもった子どもたちの卒業後の進路と、就職率はどのくらいか」、「防災教育について、どのような取り組みを行っているか」などといった質問があがった。また、韓国教職員から日本教職員に対して、「事務作業などはいつ行うのか。また、事務だけを担当する人が別途いるのか」、「残業手当は支給されるのか。また給与水準はどれくらいか」などといった質問があがった。懇談会終了後、学校の前で集合写真を撮影し、同校をあとにした。

ル、コーヒーショップ、製菓実習室、モデルルーム、ゲームコーナー、陶磁器製作の施設などさまざまな教具・教材がそろっていた。このような充実した施設は目を見張るものがあったが、この学校が目指す特別支援学校のあり方に注目したい。これらの充実した施設は、支援のためにあるというよりも社会参加ができるようになるためのものであるという印象が強かった。コーヒーショップや製菓実習室のようなキャリア教育につながる職業体験やモデルルームで日常生活を送るための訓練など卒業後のことを見据えている。WHOが近年、「障がい者」の定義を改定したことに象徴されるように「障がい者」とは健常者に支援される立場(健常者と同じことができるようになるための支援)のことではなく、健常者とは違う文脈で社会に貢献する立場であると認識が改められている。つまり、社会から排除される対象ではなく、包摂される対象であるということである。このように社会の多様性をどのように担保するかということを考える契機になりうる。以上のように考察するとこの学校の実践もGCEDに資するものであるととらえることができる。

森裕紀子……特別支援学校の訪問ということで、非常に興味深かった。韓国の中でも最先端の特別支援学校というだけあり、施設のすばらしさに目を奪われた。各クラスにモニターやプロジェクターが設置されており、映像や写真などの視覚的な教材を使って授業されている様子が伝わってきた。やはり国は違えど、視覚的な手だてを用いてよりわかりやすい授業を行うということは同じであると再確認できた。日本でも韓国でも特別支援学校においてESDが広がり深まっていくことを期待する。



熱心に意見交換を行う両国の教職員(世明学校)

【参加者の感想】

津山直樹……今回訪れた学校の中で唯一の特別支援学校である。校舎が広大で豪華であるというのが、一歩足を踏み入れた際の感覚であった。実際に温水プー

4. 文化体験

A グループ

水原華城

金属活字伝授館・清州古印刷博物館
隆陵・健陵

B グループ

桐華寺

A・B グループ

ホームビジット

A グループは、水原華城、金属活字伝授館、清州古印刷博物館、隆陵・健陵を、B グループは、桐華寺を訪問した。7月15日には、各地域でホームビジットが行われた。

スウォン

水原華城 (A グループ)

訪問日：7月13日 記録：吉元 祐介

概要：水原華城は、朝鮮 22 代正祖大王が、父親のお墓を水原花山に移転した 1794 年 1 月に着工し、1796 年 9 月(2 年 9 ヶ月)に完成した城郭である。周囲が 5.7km、城郭の高さは 4～6m である。石材とレンガを併用し、矢と槍剣、鉄砲で防御する近代的な構造を持っている。また、用材を規格化し、重機を用いて科学的、実用的に築造した「建築史上独歩的な建築物」と評価されている。それ以降戦争などにより多くが破損した。しかし、詳細な建築記録が記録されている「華城城役儀軌」に基づき修復がされていたことにより、1997 年 12 月イタリアのナポリで開催された、ユネスコ世界遺産委員会第 21 次総会において世界文化遺産に登録された。

ソウルから車で約 1 時間、忠清北道への道中、水原華城を見学した。到着すると、韓国特有の大きな門がバスを降りた我々を迎えてくれた。この長安門(北門)からは、現地ガイドから説明を受けながら見学した。ソウルの南大門も立派であるが、長安門もまた荘厳さがあつた。長安門は他の門と違い、上に登れるということで、急な階段を登った。少し上がるだけで、見晴らしがよく周囲

が一望でき、大変爽やかであつた。城壁にはいくつもの穴があげられてあつたり、門から飛び出した場所があるなど、外敵から守るための工夫がいくつも施されていた。門は直接城壁とつながっており、遊歩道のように整備されていたのでその道を歩きながら、ガイドの話に耳を傾けた。ガイドの説明から、正祖大王が偉大な人物であり、今でも韓国国民から尊敬されていることを知ることができた。水原華城は、君主の父親の墓を守るために作られた要塞であり、正祖大王が、生涯 13 回父親の墓を参るためにこの地に来られたと記録されている。韓国史上、大王と呼ばれるわずか 3 人のうちの 1 人である、正祖大王は人民に慕われた名君主であつたと言われている。長安門はその大王が入城する門であることから、城の北側にあるが特別に正門とされている。大門は東西南北に 4 つあり、その他にも、城を警護するための施設などが 500 ほどあるとの説明があつた。現在では、市内に点在するのみで、市は修復を進めているとのことである。最後に韓国伝統の弓道武術である国弓を体験し、見学を終えた。



長安門の前での記念撮影(水原華城)

【参加者の感想】

平野和香子……………ユネスコ世界文化遺産である、第 22 代正祖大王の構築した水原華城を、長安門から華虹門を経て東将台まで、壮大な城壁と建築美に酔いしれながら歩いた。ガイドさんの熱の入った説明から、正祖大王の優れたリーダーシップと民を思う気持ち、そして父に対する畏敬の念が窺えた。処世術と人の動かし方を歴史に学んだ。

金属活字伝授館

清州古印刷博物館 (A グループ)

訪問日：7月15日 記録：吉元 祐介

概要:金属活字伝授館は、直指時代の紙すきや印刷の製法を再現し、保存継承をしている。また、その技法を用い製本体験ができるようになっている施設である。また、隣接する、清州古印刷博物館は、世界で最も古い金属活字本である「白雲和尚抄録仏祖直指心體要節(別名 直指)」を印刷した清州興徳寺址に1992年に開館した博物館である。世界で初めて金属活字の印刷物を制作したことを広く知らせるとともに、先祖たちの偉業を後世へ伝え、韓国の印刷文化をさらに発達させる科学教育の場として活用されている。また、ユネスコ世界記録遺産に関する講習会の開催、世界の印刷博物館(ドイツ、中国など)との交流を通じた研究、協力事業などを行っている。

金属活字伝授館に着くとまず、製本体験を行った。製本は①紙漉き、②表紙の模様付け、③木版印刷 ④金属活字版印刷、⑤製本の5つの工程を行った。その後、館長から当時の製法について館内を巡りながら説明を受けた。続いて、隣接する清州古印刷博物館に移動し、「直指」の歴史的価値について、館内ガイドの方から説明を受けた。その後、当時の製法やその後の印刷技術の発展の様子などが展示された館内を見学した。



製本体験を楽しむ訪問団 (金属活字伝授館)

【参加者の感想】

吉元祐介……文書の作成や保存は、今ではコンピュータで簡単にすることができる。しかし、日本では、近年なるまで、経典などの大切な書物は書き写すことでしか保存、伝播することができなかった。それを、韓国では13世紀(日本では鎌倉時代)にこ

のような金属活字の技術が開発されていたことを知り驚いた。

菅谷忠由……ユネスコ世界文化遺産に指定されている金属活字の発明に直接触れることで、その伝統の重みを感じることができた。また、韓紙作りから製本までの過程を体験することで、韓国文化の一端に触れることができた。

ユンルン コルルン 隆陵・健陵 (A グループ)

訪問日：7月16日 記録：吉元 祐介

概要:隆陵は莊祖(正祖の父)と献敬王妃の陵、健陵は正祖(朝鮮王朝22代王)と孝懿王妃の陵である。正祖は、悲運の死を遂げた父への深い愛情を持っており、生前から、「自分が死んだら父親のそばに埋葬してほしい。」と願っていたことから、ここには二つの陵が並んで祭られている。

忠清北道から仁川への移動の途中に、京畿道華城市にある、隆陵・健陵に立ち寄り、健陵を見学した。現在では、2つの陵への入り口は1つになっており、齋室と呼ばれる管理所から5分ほど歩いたところに正祖とその妃が眠る健陵があった。健陵では、ガイドの説明を聞きながら、紅前門、丁字閣、碑閣等を見学した。



ガイドの説明に耳を傾ける訪問団(健陵)

【参加者の感想】

吉元祐介……太い幹のクヌギの木がたくさん立ち並ぶ大きな森、きれいに整備されているが自然のままの姿を大切にしたい道、凜とした空気にこの場所が韓国の国民にとって特別な場所であることを感じた。王陵を見学して、感じたのは日本の天皇陵と同じよ

うな思想をもってつくられていることである。ただ、鳥居を越えた先にある参道は、日本と違い中央の神様が通るとされている道の横に、もう一つ王が通る専用の道があった。朝鮮王陵の価値は、原型保存だけにとどまらず 600 年以上も受け継がれてきた祭礼儀式にもあることを聞き、脈々と受け継がれている祖先を大切にする韓国の国民の思いを感じる時間となった。

ドンファ 桐華寺 (B グループ)

訪問日：7 月 15 日 記録：津山 直樹

特色：大邱都心部から北東に 22km 離れた八公山の南に位置する。創建当初の名前は、瑜伽寺であったが、興徳王の時代に心地大師が改築した際に冬でも境内に桐が咲いていたことから桐華寺と名を変えた。現在の大雄殿は 1727 年に改築されたもので、念仏庵を含めて 6 つの庵を有する。境内には統一を祈る高さ 33 メートルの石造大仏「統一薬師如来大仏」があり、全国民の南北統一への念いを集めている。

禅宗寺院ということもあり、車で急こう配を上り、緑に囲まれた場所に建っていたお堂の中で茶道体験をした。住職に作法を説明してもらいながら、実際にお茶を入れて、来客に振る舞い、飲んで、片付けるまで一連の流れを学んだ。日本のように抹茶ではなく、緑茶であった。大雄殿の周りにいくつかのお堂が並んでいるかたちであった。寺内の桐の木が、心地大師が桐華寺と名付けた由来となった。この桐の木や周りの竹の木には、鳳凰が止まるという言い伝えがあり、重宝されている。鳳凰は韓国においては重要な存在で、大統領の判子にもその絵柄が採用されているとのことである。



韓国式茶道を楽しむ訪問団 (桐華寺)

【参加者の感想】

津山直樹……………歴史ある建物に気が引き締まる思いがした。禅宗寺院であるために静かに修行するための立地や建物のたたずまいであった。その一方で、談笑しながらの茶道体験は少し意外ではあったが、韓国の文化の奥深さや美徳さなど寛容さを感じることができた貴重な体験となった。

ホームビジット (A・B グループ)

実施日：7 月 15 日

太田かおり……………今回、初めて韓国を訪れたが、韓国で一般家庭を訪問し、韓国の家庭料理や日常生活を体験できたことは大変貴重な経験となった。韓国の伝統的な家庭料理であるキムチやサムゲタンを美味しく頂くことができ、食卓の和やかな雰囲気を味わうことができた。親が子を思う気持ちや子どもの成長を願う思い、さらには家族や家庭の温かさは、世界共通の温もりなのだと実感した。訪問先には高校生の双子の兄弟がおり、兄は中国語を、弟は日本語を熱心に学んでいた。「好きなゲームがあり、字幕を日本語で理解したいから」という高校生らしい理由であったが、日本の文化や社会に関心が高く、高校生の段階から敬語を用いた美しい日本語を話すことに驚きと感動を覚えた。なお、韓国の中学校・高等学校では、国語と英語に加え、第二外国語の教育を行っており、多くの中高生が英語に加え、もう 1 つの外国語を身につけているという。グローバル化が加速する現代社会において、今後を見据えた言語教育政策の重要性についても考える良い機会となった。

千葉貴幸……………私が訪問した家庭は 4 人家族で、大変温かく迎え入れていただいた。最近 2 年間で 4 回も日本を訪れるほど日本への関心が高い家族で驚かされた。高校生の女の子は学校で第二外国語として学んできた日本語を積極的に使い、進んで私たちと関わろうとしてくれた。今回のホームビジットを国際交流のチャンスと捉え、学校での学びを生かそうとする彼女の様子に大変感心した。一緒にボウリングをしたり、手作りの伝統料理を楽しんだりしながら、団欒の時間を大切にしようとする姿が印象的だった。文化や歴史、礼儀作法、人との関わりを大切にする韓国の家庭の様子を知り、これまで以上に韓国の人々を身近に感じることができた。

西川有紀……………両親の愛をとてよく感じるご家庭で、わたしたちのことも温かく受け入れてくださった。旅行好きの家庭で、日本にも訪れたことがあるそうで、日本にす

ごく興味をもって来ていた。たくさん家庭料理もいただき家族団らんとでも楽しい時間を過ごさせてもらった。帰りに「受け入れが決まった時はすごく不安だったけど、今日 2 人にお会いできてとてもよかったです」と言ってくださったことがとても心に残っている。

大和田智子……家の中を案内していただくと、外国のものが多い。聞いてみると旅行が好きで、すでに 6 カ国は行ってきたのだという。その中に日本もありうれしかった。子どものために勉強部屋とベッドルームの 2 部屋を与えていた。学習に集中できるように両親ができる限りのことをしている様子が分かった。会話は、英語でやりとりできた。両親も英語が話せるが、娘に通訳をさせて英語を話す機会をもっていたのが印象的だった。その英語力や発音の良さに驚く。小さい頃から英語の学校に通い、スピーチコンテストでも良い成績を収めているようだ。日本からもっていったお土産の民芸品、その由来などを話したり、写真を見せて日本の学校生活を紹介したりして、話が盛り上がり楽しい時間を過ごすことができた。両親の関わり方がとても素敵だった。その後、母親の手料理をごちそうになった。韓国の定番という「キムパ」「トッポギ」「プルコギ」などたくさんいただいた。初めての韓国訪問なので、初めて口にするものもあり、興味深く美味しかった。「キムパ」は日本の海苔巻きに似ていた。アレンジして手巻き寿司のようにしていただいた。どの料理も彩りが美しく、目で楽しめて、実に美味しかった。時間を掛けて準備をしてくださったことが感じられ、温かく迎えてくださったことに感動し、感謝の気持ちでいっぱいになった。温かい家庭ではよい子が育つ。日本でも韓国でも、子どもを育てる環境は大切だと感じた。李さんの素晴らしいご家庭を訪問させていただいて、特に家庭の果たす役割は大きいと改めて感じた。

大江隆喜……今回お世話になった家庭は前日に訪問した源花女子高校の教職員宅ということで対面式前日にお会いしていたことと伊先生が英語教師であり日本語を学習されていることから、多少の緊張はあったもののお気遣いいただき、いろいろな視点で韓国事情や韓国家庭の教育観等を伺うことができた有益な時間となった。また、私事旅行等では経験できない異国の一般家庭に入り、日常生活のほんの一部を垣間見れたのことはとても良かったと思う。さらに、伊先生は日本好きで何度も訪日されているとのことであつたことから意外と私が知らない日本のことを逆に教えていただき、恥ずかしながら驚きのひと時もあつた。

津山直樹……自身の所属と同じ国立の教員養成系大学附属中学校の日本語の先生にお世話になった。

家庭を訪問する前に学校を案内していただいた。先生が担任をされているクラスを例にして韓国の生徒の学校生活全般について紹介していただいた。ハード面では、全クラスにモニターの役割をする大きなテレビが設置されており、一人の生徒の意見を瞬時にクラス全体で共有できるように配慮されている点や日本の教育学者である佐藤学が提唱している「学びの共同体」の理論を援用して、机の並び方が常に班ごとになっている点などの特徴があつた。また、学校の図書館の中には前面にスクリーンが設置されている教室もあるなど充実していた。さらに日本の植民地時代に建てられたレンガ調の尋常学校の校舎もそのまま残されており、現在も使っているとのことであつた。

その後、先生のご自宅に招いてもらった。玄関のドアには、日本語での飾りつけがなされていて、歓迎された。夕食はチャプチェやキムパなど韓国の家庭料理をふるまっていた。奥様や小学生の息子さんと幼稚園児の娘さんも交えて談笑しながらの夕飯となった。

夕食後、宿泊していたホテル近くのカフェで 90 分ほどこれからの日韓の相互理解に向けた教育についての議論をさせてもらった。両国の様々な問題を話し合うことができるようになるための日韓の若者同士の相互理解を深めるためにお互いの学校の授業実践でどのようなことができるのかということや、日本の学校にいる韓国籍の生徒とどのように向き合っているのかということ、グローバル化が進展していく中で「異質な他者」とどのように関わっていくべきかなど多岐にわたる議論をさせていただいた。また、帰国後にコラボレーション授業をする約束をした。

當麻進仁……大変熱意のある先生のご自宅を訪問し、明るい雰囲気の中で有意義な話ができた。本当に良い先生にお会いでき、心から感謝している。国際的な関係を結ぶためには先ずは先生から、というお言葉に共感した。最後は個人的なお付き合いをお約束し、ホームビジットが終了したが、これが持続可能な草の根交流の第一歩と捉えている。このような機会があることを職場にも伝えてゆくつもりである。

5. 成果・ 今後の活動

Aグループ
Bグループ
随行者のコメント

Aグループ

「地球市民教育」という視点の重要性

A-01 太田 かおり

「速く行くなら一人で行け。遠くへ行くならチームで行け」。韓国教育部国際協力官チェ・ヨンハン氏が歓迎晩餐会で述べられた言葉が強く印象に残っている。教育は世界共通の事業であるとも言われており、グローバル化が加速する現代において、世界を平和で持続可能な社会へと導くためには、各国がチームとして手を取り合い、「地球市民教育」の実現に向けて協力し合うことの重要性を強く感じている。今回の学校視察でも、「地球市民教育」という言葉を何度か耳にした。我々教育関係者は、自国の子どもたちの未来が希望に満ちたものとなるよう日々の学校教育に情熱を傾ける一方で、「地球市民教育」という視点を同時に持ち合わせていることも欠かせない。各国の伝統や文化、歴史や言語を尊重しつつ、地球市民という視点から、平和で持続可能な社会の在り方について子どもたちと共に考え続けるということは、大変重要なことである。

今回、初めて韓国を訪れたが、7日間の韓国研修を通じて得た学びは、韓国の学校教育事情、教育政策、言語教育政策、地球市民教育、ESD、異文化理解、社会・生活様式理解、伝統文化理解、人間理解等と多岐にわたっており、大変貴重な学びの機会となった。今回のこのような貴重な学びと経験を、自分自身の中に留めることなく、より多くの方々へ発信し、共有する取組みを積極的に行っていきたいと考えている。韓国の学校訪問や文化体験から得た多くの気づきや学びを、日本の学校教育へ還元させることを通じ、これからの日本の英語教育や学校教育、ESDのさらなる充実と発展に寄与したい。

【今後の活動予定】

- 研修会や授業等で、情報や経験を幅広く共有する
- 英語教育や学校教育、ESDのさらなる発展に努める

地球市民教育の実現と普及に向けて

A-02 千葉 貴幸

新しい社会の担い手である児童が豊かに幸せに生きるためには絶えず変化する社会の中で自ら学び、課題解決のために自ら必要な知識・技能を身に付けていくことや、見方・考え方の異なる他者と協働しながら課題解決していくことが必要になってくる。日本の教育現場でも授業改善やカリキュラム開発に日々取り組んではいるものの目指す児童の姿の実現に迫ることはまだ難しく感じられる。しかし、今回のプログラムで訪問した韓国の学校には、将来の夢や自分が思い描く生き方の実現に向けて自ら課題意識をもって学ぶ児童生徒の姿があつて大変驚かされた。特に、文化交流授業の中では、他国の文化に強い興味を示し、日本から訪れた私たちと進んで関わりをもとうとする児童の様子に心を打たれた。

子どもの将来の幸せを願う教育関係者や地域住民の思いは万国共通である。共通の思いの下、時代の変化や社会のニーズに合わせ、どのように教育課程を工夫・改善していくのか。本プログラムの中で引き続き両国の教育実践の紹介や教職員同士の意見交換を継続・拡大していくことが、地球規模の「地球市民教育」の第一歩となると感じた。

【今後の活動予定】

- 児童や教職員に訪韓の様子や成果を伝える
- ユネスコスクール同士の交流を継続する
- 2017年気仙沼市ESD/RCE円卓会議等の研修会の場で、今回のプログラムの内容と成果を報告する

プログラムの目的

A-03 藤丸 浩志

学校訪問では、3つの学校を見学した。2日目に訪れた安川小学校では、授業をしている様子を見学するだけでなく、文化交流として、1つのクラスの1コマの時間をいただき、実際に子どもたちと交流をすることができた。外からでなく、中に入ってその場の雰囲気を感じることでできる経験はなかなかないので、非常に貴重な取組

みであった。陽青中学校、陽青高等学校においても、整った設備や環境で、生徒の主体性を大事にしていることを強く感じ、また生徒が実際に使用している食堂での昼食は、普段の生活の様子もわかり、楽しい時間であった。ただ、今回のプログラムの目的のひとつであるESDという観点においては、もう少し、実践をふまえて紹介または体験できる機会があってもよかったのではと感じた。今回のプログラムの目的である、日韓の教職員間による教授経験の共有やネットワークの強化、また、相互理解及び友好増進については、強く達成できたように感じるが、地球市民教育やESDの理解という点においては、相互に不透明な部分が残る、今後継続して交流をする上で、深めていく課題である。

【今後の活動予定】

- 所属校の教職員や保護者、一般の方に参加を呼びかけ、報告会を実施する
- 文化訪問で訪れた金属活字伝授館での体験を取り入れ、こどもたちが書いた作文を綴じる方法にその製本技術を活用する

子どもたちの明るい未来のために

A-04 平野 和香子

特に有意義だったのは、高等学校への訪問とホームビジットである。生徒のキラキラ輝いている姿を目の当たりにし、夢に向かって努力できる生徒を育てることが、教育の最大目標だと思った。陽青高等学校の校長先生のパフォーマンスを見て、生徒に関心を持って接しているか。教育に情熱を注いでいるか。それを、きちんと表現し生徒に伝えているか。自分自身を振り返る良い機会をいただいた。「教育とは、夢を語る事」、教壇に立ち始めた頃、先輩教員に言われた言葉を思い出した。夢に向かって学び続けられる生徒を育てる学校や教室作りを理想としていきたい。また、「理解し合う」とはどういうことなのか。ずっと考えていた。笑顔で挨拶や言葉を交わし、共に食事をし、また会いましょうと肩を抱き合えば理解合ったことになるのか。「理解する」とは、自分と異なるものを受け入れること。そして、お互いが受け入れたときに「理解し合う」ことができるのではないかな。同じ言葉を話す者同士でも難しい。言葉が通じなければなお難しい。しかし、できないことではないと、この1週間を通して「明るい未来」への可能性を感じた。

本プログラムに参加し、韓国の学校教育の現状、日韓

両国の教育に関する共通点と相違点を学んだ。今後も交流を深め、両国について理解し合い、平和な世界の形成者を育てる役割を果たしていきたい。

【今後の活動予定】

- 授業で、生徒に訪韓時の様子を紹介し、国際交流に対する意欲を喚起する
- 語学的重要性を生徒に伝え、学習意欲を高める

地道な交流の継続を

A-05 細谷 邦弘

今回のプログラムで一番自身の学びが深まったのがホームビジットである。学校訪問や教育庁での訪問では教職員の方々の意見を聞くことはあったが、児童生徒とじっくり話す機会は持てなかった。その点、ホームビジットでは、陽青高等学校の生徒とそこご家族と時間をかけて交流を深めることができ、韓国の子どもや一般家庭の素の姿を知る機会を持てたのは、とても有意義であった。私が訪問をした家庭の生徒は日本文化に対する理解が深く、日本語にも堪能なため、話題が学校生活や将来の進路、日本と韓国の文化の違い、家族の様子など多岐に渡った。ホームビジットで出会ったのは、1人の高校生とその家族に過ぎないかもしれないが、こうした1人ひとりの交流こそが求められているのではないだろうか。帰国後もホームビジットで訪れた高校生とはSNSを使って交流を継続することが出来ているので、今後もこの繋がりを深めていきたいと思う。日本と韓国の平和の構築といっても、こうした次世代の育成に焦点を当てた地道な交流の積み重ねが大切であると感じた。微力ながら自分も今回生まれた交流の芽を育てていきたいと決意している。

【今後の活動予定】

- 教職員や大学院生に向けた報告で知見を共有する
- 韓国の教育事情の調査とESDの研究

韓国の教育事情から

日本の教育を見つめなおす

A-06 柏葉 昭人

韓国での学校訪問を通して、一番強く感じたのは授業のレベルの高さである。特に、ICT機器の環境が非常に整っており、教える側も学ぶ側も十分にそれぞれの力

を発揮できる準備ができていた。また、才能の豊かな児童生徒に対しては、その力をさらに伸ばしていくことのできるような授業の取組みをしており、素晴らしいと感じた。日本においては、比較的学力の低い児童生徒たちの支援に重点を置くことは強く意識されていると感じるが、その分上位層の児童生徒の支援に対してはあまり体制が整っていない部分が多い印象である。その点、韓国においては、上位層の児童生徒に対しても手厚い支援体制を整えていることは大いに参考になった。

現在、東京都の公立小中学校では来る2020年東京オリンピックに向けて、国際理解、国際交流の充実を図っていくことを求められている。本校においても、ここ数年、地域大学の留学生との交流や外国人アスリートとの交流を通じて国際交流を進めている。また、在籍する教諭にも日本人学校経験者が数名おり、教える側の教員が国際交流の経験があるかどうかによっても大きく充実度が変わってくる。そのため、今回のプログラムに参加できたことは大きな収穫となった。

【今後の活動予定】

- 海外研修報告会で、韓国の教育事情などを紹介する
- 6年生に対して外国文化についての授業を行う

全ての人が

幸せに生きられる世界のために

A-07 加藤 芳恵

どの訪問校でも、楽しい学びの雰囲気が感じられた。高校生は英語が日本語で意思疎通ができ、自立心も旺盛な生徒が多い。特別支援教室も各校にあり、学校の態勢としては、どの生徒にも学校での居場所が確保されている。学校外での経験にも重きを置き、周りのこと全てを学びの機会としている。旅行も親の署名で公欠扱いになり、英語施設に通い単位取得もできる。読書や芸術を通して人格を育てることに力を入れており、情操教育も大切にしている。個々の得意分野を伸ばし発表する機会を与えることで、自信に繋げるきっかけにしていると感じた。また、異なる価値観を認めつつコミュニケーションを取らせる人文教養教育も積極的に行われている。勉学に励み将来社会に貢献する人物になるには、モチベーションを維持する個人的力が大きい。その力を発揮するには、整った環境が必要である。誰でも、どこに住んでも、いつからでも学べる環境が望ましい。情報・教育格差を起さず埋もれていく人材を減らすために、世界

の各教室にICT設備を設置できればと思う。私個人としては、目の前の生徒たちにさまざまなことを伝え、考える力を育むような姿勢を見せ続けたい。人権を尊重するために各国が協力し、地球に生きる人たちが全てが、平和で安全に過ごすことができる日々を願う。

【今後の活動予定】

- 自身が世界と関わっているという気持ちを持つよう生徒に情報を提示し続ける
- ホームステイやホームビジットを積極的に受け入れる

「つながり」を大切に

A-08 河西 透雄

今回のプログラムに参加して強く印象に残っていることは、まず、韓国の人々の温かさに触れることができたことだ。どの訪問先でも私たちを温かく迎え入れていただいたことに感動した。また、おもてなしの心や、歓迎の気持ちを精一杯に表現することの大切さを改めて感じることもできた。次に、韓国の教育のレベルの高さに驚いた。約20年前から取り入れられている英語教育や、ICT機器を取り入れた授業づくり、また、スクールボリスの設置、教室の使い方や教材管理の工夫などは、これから私たちも見習うべきところだと感じた。韓国と日本、国は違っても子どものため、平和のため、未来のために教育に取り組む姿は同じだと感じた。最後に、「早く行くなら一人で、早く行くならみんなで」という言葉が強く心に残った。この訪韓でたくさんの人と出会うことができたことに感謝しなければと感じた。このたくさんのつながりを大切にしていきたい。

【今後の活動予定】

- 教職員や児童への報告会
- 大阪ユネスコスクールネットワークでの報告会

心の壁は高くない。

A-09 児玉 岳

「心の壁は高くない」。これがこのプログラムを通して最も強く感じたことだ。言葉の壁、文化の壁。日本と韓国との間に様々な壁があることを改めて感じさせられる場面がこの研修でもあった。しかし、よりよい教育をしたい、より良くなりたいという心の部分では、一緒だということを感じた。それを強く感じたのは、安川小学校へ訪問したとき

だ。安川小学校では小学校4年生の授業参観、小学校2年生での文化授業を行った。授業参観では、不平等に配られたお菓子を食べたり、クイズに答えたりしながら、貧しさとは何かということを考えさせていた。事前の綿密な準備無くして成立しない授業だと感じた。生徒に理解を促すにはどのようにすればいいかということが考え、授業を行う教師の情熱は日本も韓国も変わらないと感じた。文化授業では、「かるた遊び」の授業を行った。かるた遊びが始まると、韓国語で問いかけてくる児童に対して、答えることができず、言葉の壁を感じることもあった。しかし、かるたに取り組む姿勢からは、活動に向かう気持ちも日本の児童と同じだということを感じることができた。実際に韓国の教育現場を肌で感じ、心の壁は高くないことを感じられたことが自分にとっても大きな財産とすることができた。

【今後の活動予定】

- 韓国教職員訪の受け入れ
- 韓国の中学校との手紙やEメールを通しての交流

コミュニケーション能力の真髄

A-10 圓山 裕史

一番有意義に感じた時間は陽青中学校で子ども達とサッカーをした時間であった。自分の得意なことであったので、ほんの少しの英語で子ども達と心を通わすことができた。またホームビジット先のお母さんは素敵で笑顔でもてなしてくれて、これもまたほんの少しの英語で交流ができた。コミュニケーションにおいて言語力は確かに必要であるが、その根底には自信やもてなしといった気持ちがあるのではないかと自分の教育活動を振り返ることができた。またESDについても、韓国の実践や現状を見たり、聞いたりすることでESDに対する意欲が高まった。今までは過去の事例をもとに行っていただけだったと反省するとともに、まずは理解を深め、それをもとに教育活動を展開していく必要があると感じた。このように異文化に実際に触れたり、日本全国各地の先生たちと交流したことで、自らを振り返り、新たな考えが生まれてくる。そんな刺激になる貴重な時間がこのプログラムの一番の魅力である。

【今後の活動予定】

- 韓国の学校や生活の様子についての授業を行う
- 訪韓の経験を職員間で共有する

安川小学校で感じた共通点と相違点 —文化交流授業と給食を中心として— A-11 山方 貴順

多くの共通点を感じることでできた40分間であった。共通点とは、次に挙げるような、教師の配慮や授業の構成である。「こうしたら子どもはのってくるだろう」、「盛り上がっているからこそ、ここは静かになるまで待って、ゆっくり聞かせたい」、「まずは、誰しもが知っていることを導入に、徐々に考えなければ解けない問題を、という構造にしよう」、「飽きてはいけなから、このあたりで具体物を提示して、流れを少し変えよう」、「ルール説明の際には、手元に何も無い方がいい。話をしっかり聞かせてから、道具を配ろう」。これらの普段から行っている配慮は、どの国でも通用するのだと、身をもって感じた。今後も引き続き、ユニバーサルデザインを考え、合理的配慮を欠かさず、1人の児童も漏れ落とさない教育を続けていきたい。また一方で、相違点としては、授業外の様子が顕著であった。特に、給食の様子が印象的であった。日本では、全員の机の上に食事の準備ができてはじめて、全員で「いただきます」の号令をかけ、食べ始める。しかし安川小学校では、自分でおかずを入れに行き、準備ができた者から食べ始めていた。また、食べきれず残す児童も多く、日本との文化の違いを感じるきっかけとなった。隣国とはいえ、国が違うのだから、共通点や相違点がある。頭では分かっていたが、実際に経験することで、違っていることが当然であり、強制したり迎合したりせずとも良いことに気付くことができた。

【今後の活動予定】

- ユネスコクラブを立ち上げる
- 県や市で開催される部会での情報共有

人と関わり心をつなぐ

A-12 佐久間 みのり

今回の訪韓は期待を遥かに超えて意義深いものであった。その理由は韓国の方々との交流が生まれたことである。ホームビジットで訪問させていただいたご家族だけでなく、以前、このプログラムに参加された韓国の教職員の方々とも連絡先を交換し、交流が始まっている。私自身、訪韓前は交流について何かと堅苦しく考え、上手くいくだろうかと不安も大きかったが、韓国で出会った

方々の温かさに触れて肩の力が抜け、交流の1つひとつを楽しむことができた。今回経験させていただいたような民間レベルでの人と人とのつながりをたくさん紡いでいくことが、両国の発展につながるのではないかとの思いを強くした。今回得た韓国の方々とのつながりを大切に、韓国の方々の素晴らしさを自分の担任する子どもたちに伝えていきたい。

【今後の活動予定】

- 教職員向けの報告会の実施
- 韓国の学校や生活についての授業
- SNSを通じて、情報交換を続ける

～肌で感じる事が理解への一歩～

A-13 水野 愛実

今回、韓国へ行き大きく2つのことを感じた。1つめが、全ての訪問先で盛大に歓迎してもらえたのが印象的であった。私たちを、笑顔で受け入れ、私たちに分かるよう日本語で標識を作り、きめ細やかに韓国文化を教えてくれ、また、丁寧に質問に答えていただいたことで、あらためて温かさを感じる事ができた。2つめは、教育現場での思いである。考え方などは、私たちと一緒にと思った。子どもたちが将来苦労しないよう、今できることや今してあげられることを考え実践していること。障がいのある子に対して最終目標はみんなと変わらず社会に出て活動できるようにすること。そのため、大学まで途切れのない支援をし続ける。そして、自分の夢を早い段階で見つけ、叶えられるよう自立支援活動があること。先生と生徒のコミュニケーションがたくさんとれるよう反転授業があること。思いは一緒だが、韓国ではここまで教育が進んでいるのを実感した。今回肌で感じ、共有できることは現場へ持ち帰り実践していきたい。今回の訪問で自分自身が成長できたのを感じた。

【今後の活動予定】

- 韓国教職員の受け入れ

貴重な出会い

A-14 中間 貴之

今回の訪韓の前に1度韓国を旅行で訪れたことがあった。わずか3日間、また観光地を巡っただけということ

もあり、韓国の教育や文化について深く知ることは叶わなかった。そういったこともあり、今回一番楽しみにしていたのはホームビジットだった。韓国の家庭にお邪魔し、話をすることで、深く韓国を理解できる契機になると考えたからだ。訪問先のパクさん一家は笑顔で歓迎して下さった。韓国の伝統的な料理を頂きながら、両国の文化の違いや生活様式の違い、また、たわいもないお話をたくさんすることができた。わずか3時間余りとはいえ、家族のように温かく接して下さい、大変感慨深いものがあった。韓国と日本、国は違えども同じ人間であり、共通の話題で笑顔になることができ、価値観を共有できるのだと再認識した。両国間には未だに溝があり、関係の改善にはまだまだ至っていない。しかし、今回のように人と人が絆を育むことが、関係改善の第一歩と考える。1人ひとりの交流は小さなものかもしれない。しかし、この交流の輪が広がり、大きなものとなったとき、日本と韓国は強い関係となるのだと考える。今回のパクさん一家との出会いを一生の宝物としたい。

【今後の活動予定】

- 経験を共有する
- ESDの促進

相互理解の大切さ

A-15 中田 望希

韓国を訪問するまでは韓国は近くて遠い国だと思っていた。行くのに飛行機で2時間しかかからない国であるが、実際にどんな国で子ども達がどのような教育を受けているかは知らない。そんなことを思いながら実際に訪れた韓国は日本との共通点が沢山あり、共感する部分も多かった。どの学校でも子ども達が真剣に考える様子や、理解をすると嬉しそうな顔をするところ、先生方の子ども達のために頑張ろうとする努力を見ることができた。違う国であっても子ども達の学ぶ姿勢や、先生の教育への熱意は変わらないのだと感じた。また、安川小学校では地域の人と協力し、教育を行っている。日本では、学校に学童や地域の貧しい子ども達に対する支援は校内でほとんど行われる事はないが、そういった専門の先生や部屋があった。学校と地域、そして家庭が協力をして子どもの教育をしているのだと感じた。今回の訪問で今まで知ることが出来なかった韓国の姿に触れることが出来た。今後はより理解し協力することが出来るように、交流を深めていくことが大切だと思った。

【今後の活動予定】

- 授業で生徒に韓国の学校生活について伝える
- 韓国の教職員の方との交流の継続

つながり

A-16 西川 有紀

本プログラムを通して、韓国の先生方・子どもたち・家族・文化・自分とのつながりを感じることができた。その中で、特に2点のつながりが印象に残った。

1点目は、日本の文化と韓国の子どもたちとのつながりである。私は、安川小学校で日本のわらべうたの手遊びの授業をさせていただいた。授業の中で、日本のわらべうたを楽しそうに歌いながら手遊びをする子どもたちの様子を見て、日本の文化と韓国の子どもたちがつながっていく様子を感じることができた。

2点目は、自分と韓国の家族とのつながりである。私がホームビジットさせていただいたご家庭は、ご両親と中学1年生の娘さんの3人家族で、娘さんに対する愛情を感じてご家庭だった。私たちのことをたくさんのおもてなしで、温かく受け入れてくださった。そして、日本と韓国の文化や学校の様子など様々な話をすることができた。ホームビジットの終わりに、ご両親が、「受け入れが決まった時は、正直とても不安だったけど2人に会えてとてもよかった」と話してくれたことが非常に心に残っている。文化や言葉の壁を超えて私たち日本の教員と韓国の家族の方々と心のつながりを感じることができた。

本プログラムを通じて、文化と人、人と人とがつながっていくことはすてきなことだと感じた。日本の子どもたちにもこの経験を伝えて、つながることのすばらしさを知ってもらいたい。

【今後の活動予定】

- 教職員と児童に対して報告を行う
- 韓国で出会った方との交流を続ける

驚きと感動の連続！

A-17 大和田 智子

全てのことが心に残る素晴らしい時間だった。韓国のよさをたくさん発見できた。小学校で日本文化交流授業と題して授業をさせてもらったのがとても貴重な経験になった。言葉の壁を越えて授業するため、活動中心となる。

片言のつたない韓国語を真剣に聞き、興味深く活動する子どもたちの姿は、感動的だった。日本も韓国も子どもの姿は変わらないと感じ、心が温かくなった。

どの訪問先でも施設設備がかなり充実しており、社会全体が教育に対して力を惜しまない、そういう雰囲気を感じた。

印象に残っていることは、英語力の高さだ。中学生と話することがあったが、実に流暢な英語で話していた。コミュニケーションのツールとして機能している。教科の1つでもあるが、ふだんの会話の手段として意識されているところが素晴らしいと感じた。韓国は日本よりずっと前から英語を公教育に取り入れている。その成果もあるのだろう。しかし、ほとんどの子どもが私設の塾に幼少期から通い、学力を高めていることも知った。日本も2年後には英語が教科として小学校で教えられる。日本では、子どもの貧困率の上昇、経済格差が教育格差になっていることが指摘され、注目されるようになってきた。英語教育で先を行く韓国の成果と課題が、これから始まる日本にはよい示唆を与えてくれると感じた。

【今後の活動予定】

- 教職員に対する報告会を行い、経験を共有する
- 韓国を紹介する授業を行う
- 韓国の教職員との交流を続ける

人を想う心

A-18 菅谷 忠由

私たちは、「不易と流行」のバランスを取りながら、「教師は現場で育つ」を合言葉に、同僚性の中で、世界に誇れる日本の教育を創り上げてきた。今回、韓国を訪問させていただき、よいと思われるものを何でも取り入れ、ある意味ではトップダウンでダイナミックに教育を変えていこうとしている韓国の前向きな姿に驚きを感じた。教育は「百年の計」であり、その結果はすぐにわからない。子どもたちにとって、何がベストであるかは、子どもたちに直接関わる私たちが、目の前の子どもたちをしっかりと見つめ、話し合いながら、よりよいものを考えていく中で生まれてくるものだと思う。ただ、今回訪問させていただいたどの学校の先生方も、私たちと同じように、「すべては子どもたちの笑顔のために」、日々の教育活動に懸命に取り組まれており、先生方の指導の下、出会った子どもたち一人一人に思いやりの心が育っていることに感銘を受けた。ユネスコが推進するESDを支えるものは、人

種や性別、障害のあるなし、様々な立場を乗り越え、困っている人がいたら声をかけ、手助けする、「人を想う心」を育ててくことだと考える。本プログラムに参加したことで知り合えた、すべての方々とのふれあいを通して、さらに、その思いを深めることができたことに感謝する。

【今後の活動予定】

- 千葉県ユネスコ連絡協議会やユネスコスクールとの連携で ESD の取組みを広げていく
- 韓国教職員の受け入れ

『韓国訪問を終えて・・・』

A-19 戸田 拓人

今回のプログラムでは、色々なことを経験させていただいた。学校訪問やホームビジット、文化探訪など、そこで触れ合う人々から受けるあたたかく優しい触れ合いに何度も心を揺さぶられ、現地の方との心の交流ができたことが非常によかった。また、韓国の教育事情や ESD など、韓国に行かなければわからないことを自分の目で見て、耳で聞いて、色々なことを感じることができ、とても勉強になった。一番印象に残ったことは、安川小学校訪問である。はじめは、自分が外国で授業だなんて考えてもいなかったが、授業を進めていくと、予想以上に盛り上がり、日本文化を楽しんでくれることに喜びを感じ、楽しく授業を進めることができた。子どもたちとのかわり合いは、とても有意義なものであり、今後の日韓両国がよりいっそう良い関係が築けていけたらと感じた。今回のプログラムを終え、さらに韓国に対し興味が高まった。韓国の方々との交流や日本各地から集まった教職員と一緒にプログラムに参加したことが、今後の自分の力となるよう頑張りたい。今後も今回知り合った韓国、日本の方々との交流を続け、繋がっていききたい。

【今後の活動予定】

- 園児に韓国について紹介する
- 教職員の集会での報告

教育活動に対する思い

A-20 戸ヶ瀬 裕貴

本プログラムで一番有意義だったと感じたのは、ホームビジットである。小学校や中学校への訪問では、学校

教育について学ぶことができた。さらに、ホームビジットでは家庭内での教育について学ぶことができた。訪問した家庭では、息子が2人おり、それぞれ違う中学校に通っていた。韓国では、保護者の教育に対する情熱が熱く、学校に対して非常に関心が高いという話を聞いた。そのため、ホームビジットでは、日本の学校では高齢化に対してどのような対策をしているのかや、高校受験などについて話をし、情報交換を行った。将来、子どもが生きていく中で、どのような問題が起きてくるのかを真剣に考えていることに驚いたと同時に、学校での教育に対し強い期待と思いをもつてるとを知ることができた。本プログラムでは、日韓両国の違いをたくさん見つけることができた。しかし、どちらの国でも、子どもや教育に対する情熱や思いは同じであるということにも気づくこともできた。未来を担う子どもたちが、より良く生きていけるような環境を作ったり、考えさせたりすることがこれからの学びには必要であることを改めて感じた。韓国に行って学んだことを、これからの教育活動に活かすと同時に、周知をして、子どもたちのための教育ができるようにしていきたいと思う。

【今後の活動予定】

- 教職員に韓国の教育現場や学習の様子を発表する
- 児童に韓国の子供の様子を伝える
- 教育委員会での報告

個の能力を様々な学びの機会の提供から育む韓国教育

A-21 上重 卓広

文化と言語の理解が不十分であったことは、本プログラムを終えた私の一番の後悔である。韓国教育の理解を深めるためには、今に至るまでの歴史的、社会的な国の背景を充分に理解しないと出来ないことが痛いほど分かった。その点で私は、教育改革の背景とあわせて学んだ韓国教育開発院の講義は、有意義であった。社会教育に携わっている関係から、陽青中学校、陽青高等学校の放課後活動に大変興味をもった。現在の日本の中学校・高等学校における部活動とは若干異なり、生徒の自主性、自立性を重んじたこの活動は、まさに生涯学習の考え方が中心にあることを強く感じた。学んだ成果を地域で発表したり、外国の学校との交流で生かしたり、学校の学習へ返っていったりすることなどの話を聞き、韓国教育では生涯学習の素地作りも行っているのだと

理解をした。イングリッシュ村や地域産業、他校との交流、地域人材の学校への協力体制など、様々な学校外での教育活動の展開が可能な環境づくりが、子どもたちの将来への夢の育成へとつながっているのだと思った。

日本の教育と似ている点が多いと感じる一方、保護者や子ども、学校の学校教育への認識のずれが小さいことや様々な教育の場と在り方の提供から説明責任を充分果たし、三者で共に作ろうとする学校の姿に学ぶべき点があると強く感じた。

【今後の活動予定】

- 地域や保護者が協力できる学校づくりを目指す

次の一步

A-22 山崎 貴雄

韓国の教育事情は、テレビなどによる報道以外では知ることができず、教育交流の機会をうかがっていたところ、本プログラムを知り、迷わず応募、参加させていただくこととなった。

文化交流授業では、児玉先生の学校(池田町立池田中学校)の生徒が作ったカルタを韓国語で読み上げるだけであったが、大変盛り上がった。札の取れない児童が泣き始めるなど、日本の子どもたちと何ら変わらないことに気が付いた。給食も教室で子どもたちと一緒にいただいた。準備のできた児童から食べ始め、「いただきます」のように一斉に行動をとらないなど、細かな文化の違いは見られた。

陽青中学校、陽青高等学校の訪問では、学校が大変きれいで、体育館にも空調がある、全教室に教材提示用のパソコンとプロジェクターがあるなど、施設・設備もしっかり整備されていたことに驚いた。

ホームビジットでは、温かいおもてなしに感動した。ホストは、陽青中学校の3年生の女子生徒。日本語がとても上手なので、てっきり学校で習ったのかと思ったが、独学で勉強したそうである。事前にアニメ好きと情報があったので、日本で公開されたばかりのアニメ(映画)のクリアファイルを持って行ったところ、韓国でも話題になっているとのことで、日本の文化が浸透していることが分かった。

初めて知り、感動の大きかった韓国の教育事情、次は日本のものづくりを中心とした教育事情を韓国の皆さんに伝えたいと思った。

【今後の活動予定】

- 韓国の教育事情などを教職員で共有する
- 高知県の工業高校全体で国際理解教育を推進する

近くて遠い国だった韓国を訪問して

A-23 吉元 祐介

このプログラムに参加した私のねらいは韓国の教育事情を知り、日本のそれと対比しながら、日頃当たり前だと考え行っている教育活動を俯瞰してみる機会とすることである。私にとってこれまでの韓国は、「近くて遠い国」であった。地理的には北海道より近いとはいえ、「外国」である。中国の漢字はなんとなく分かるが、ハングルはさっぱり読めない。聞き取ることもできない。韓国料理は好きだが、料理名と料理がつかない。そんなことを考えていると、隣国である韓国のことを全く知らない自分がそこにいた。その知らない国でどのような教育がされているのか、少し前の日本のように大学受験が過熱しているとはよく聞けるが、実際に初等中等教育がどのような仕組みでどのように行われているのかを知りたくなった。現地の学校を訪問(授業参観)する機会を得たことで、高校が選択制であること、女性教員の比率が高いことなど、相違点をいくつも見つけることができた。しかし、それ以上の気付きがあった。それは、基本的な学校としての仕組み、先生方の子どもへの思い、学級の雰囲気、授業の進め方など、驚くほどの共通点を見つけたことである。全く違った歴史を経た別の国で、こんなに似ていることが逆に不思議に思えてきた。隣国としてお互いに影響を与え合ってきた、文化的な交流が脈々と続いていたことを実感する機会となった。このプログラムの中で出会った KNCU のスタッフをはじめ、訪問先で歓迎してくださった方々のおもてなしの心に触れ、このような機会に恵まれたことに心より感謝したい。

【今後の活動予定】

- 韓国教職員の受け入れ
- 教育委員会内での情報の共有

B グループ

「音楽に国境なし」

B-01 坪 淳子

善一女子中学校で音楽の授業をすることになり、訪韓前に一番不安だったのは、韓国の中学生在が日本人の私をどう見るのか、日本の歌を受け入れてくれるのかである。韓国は個人的に好きで、訪問するのは9回目。しかし、学校を訪問したことはなく、日に日に心配ばかりが増えていった。当日、授業の始めに「アンニョンハセヨ」と私が挨拶すると、拍手と共に温かい歓声が起り、私の心配は一気に吹き飛んだ。同校の音楽の先生に助けってもらいながら、授業はすべて韓国語で行った。授業内容は、日本の『浜辺の歌』を歌とソプラノリコーダーで演奏すること。日本の歌の歌詞やメロディーの美しさに親しんでもらいたいと思い、この曲を選んだ。生徒は、たどたどしい私の韓国語に耳を傾け、何を言おうとしているのかを一生懸命感じ取ろうとしてくれた。私が日本語の歌詞をハンダに直したものをしながら一生懸命歌ってくれた。それが何よりも嬉しかった。授業の最後には、「日本の美しい歌が学べてよかった」、「歌詞やメロディーが美しいと思った」というような感想がたくさんあった。思い切って韓国語で授業をやってよかった。私という韓国が好きな日本人がいるということが少しでも伝わったかなと思う。国と国の関係はお互いを認め合うところからスタートする。私の片言の韓国語や日本の歌を温かく受け入れてくれたことに感謝している。

【今後の活動予定】

- 韓国と日本の教育制度の違いについて伝えていく
- 生徒たちに他国に対して偏見のないように国際理解の重要性を伝える

ともかく研修と交流

B-02 藤野 明彦

個人的には何度も行っている大韓民国。ここ10年でも5回以上は行っているだろう。学生時代からだから30年以上前になる。何年かに一度は意識的訪韓してきたから、その社会の変化や政治的状況も注視してきた。ソウルには現地の友人(嫁の会社の同僚夫妻)もいるし、彼らや

彼らの家庭を通していろいろな事を教えてもらってきた。少なくとも外見だけでなくいろいろな面で同質性を感じ、同じアジア、それも北東アジアの人だなと痛感してきた。また、前任校である東京都立国際高等学校時代にソウル外国語学校と仁川外国語学校との相互交流と姉妹校締結に伴って汗を流した経験もあり、学校の様子や雰囲気などは十分に予想できた。だからこそ1人でも多くの日本教職員にその経験を共有してもらいたいと思う。日本では韓半島脅威論や歴史問題・政治的衝突ばかりが伝えられるだけだが、普通の人間の普通の交流を通して得られる物は計り知れない。今回もこの要素が一番大きいと思う。嫌韓派の人もヘイトスピーチの人も少なくない日本の中で直接的な交流ができる機会ほど大切なものはないだろう。肌で感じる国際交流、同じ空気を吸い、友になることから始めないでしようというのだろう。あとはその経験を活かして、お互いについてもっと学ばしかたないだろう。

【今後の活動予定】

- 生徒がより容易に国際交流ができるような制度の模索
- 韓国の教科書会社への協力

繋がることは前進への近道である

B-04 平尾 京一

本プログラムへの参加については、当初は自らすすんで参加した訳ではなかった。しかし、プログラムが終了した今、経験させていただいたことに深く感謝すると共に、管理職として参加した私にとって、この経験をどのように自校の教職員に伝え、自校の教育に若手教員を導き、反映させることができるかを検討するのが私の残された教師人生の使命であると考え。訪問させていただいた源花女子高等学校のイ・ウク校長先生がご挨拶の中で、「交流とは異なる流れが交じり合い流れるという意味を持ち、流れというのはその出発点も異なり、流れる姿もそれぞれであるが、お互い交じり合い流れながら更に太い流れを作っていく。他の流れと交われない流れは時間と共に乾き切ってしまう。しかし、出会った多くの流れは川となり、さらには海に至り、長い時間が過ぎても変わることはない着いた光を作り上げる。未来を担う若い世代を育てる韓日両国の教師がお互いに異なる教育現場を学び、文化の違いを超え、互いに理解し合うことは大変有意義である」と述べられた。私が今回のプログラムで最も感銘を受けた言葉であり、帰国した翌日にすぐに若手の先生

方に体験した内容などを伝え、機会があれば参加することで自身の世界観が変わると伝えた。この経験を小さくても、母校で続けていることを少しでも前進させることが大切であると考えている。

【今後の活動予定】

- 今回のプログラムの経験を教職員で共有する

あったかさ

B-05 市橋 菜津美

全体を通して特に共通して感じたことは“あったかさ”だった。驚くほど素敵な歓迎を各地で受け、当たり前のように会場や食事・バスが準備されていて、私たちの伝えたいことを言葉を変えて伝えてくれる人がいて、各都道府県で奮闘しておられる日本の教職員と共にどうあるべきかを模索できて、1日のようにはやく1か月のように濃い1週間だった。まさに開会式で聞いた、「速く行くならひとりで駆け、遠くへ行くならみんなで駆け」の言葉通りの日々だった。

善一女子中学校では文化授業の日本の遊びの一環として、元気で可愛い20名の生徒達と一緒に折り紙で着物をつくる授業を行った。はじめは緊張してあまり話してくれなかったが、韓国語を話すと一文ごとに嬉しそうに拍手をしてくれたり、和柄の折り紙を見せると、「可愛い」と喜んでくれたり、わからないところがあると手を上げて「センセイ!」と呼んでくれたり、言葉が通じない中でも私と話そうとしてくれた。あの40分の中に心が温かくなる瞬間が何度も何度もあった。この温かさを自分の生徒にも、またまわりの人たちにも伝えていこうと思う。

【今後の活動予定】

- 韓国の学校の教職員・生徒との継続的な交流
- 所属校、大阪 ASPnet での報告
- 韓国教職員の学校訪問受け入れ

成長

B-06 黒岩 ゆい

最も有意義であった内容として、善一女子中学校での文化授業をあげたい。生徒たちの積極的に発言したり、他国の文化について興味深そうに傾く姿勢には圧倒された。教員が普段の授業から生徒の興味や関心を引き

出すような取り組みを行っているのだろう。

今回のプログラムを一言で表すとしたら、「成長」だ。それは、日韓の教育が過去の例に比べてより魅力的なものとなっていることや、教職員間や生徒ともより密な交流を行うことができたからだ。もちろん、自分自身の今後の教員としての役割を改めて見直すきっかけとなったことや、韓国に対してもっと知りたい、共有したいという気持ちが強くなったことも成長の1つと言えるだろう。

私が今回のプログラムに参加した理由は、「他国の教育事情について知る」ことだった。日本の教育を客観視することは、欠点を修正することや良いものを吸収する点で非常に重要である。現状に満足せず、日々「成長」を心掛けることは、教員を志してから自分の信念であった。今回のプログラムを通して、その信念を十分に発揮することができた。そして何よりも、先生方や生徒たちの笑顔が今も強く心に残っている。「教員になって良かった」と改めて思わせてくれるような1週間だった。

【今後の活動予定】

- 自他国理解のつながる活動を授業に取り入れる
- ICT 機器について研修への参加や教職員館での情報交換を通じて理解を深める

「共生社会の構築に向けて ～心を育む教育～」

B-07 森 裕紀子

韓国を訪問する前は、「韓国は受験戦争が激しく学力重視」という情報が強かったが、学校訪問や教育庁訪問を通して、「地球市民教育」、「幸せ教育」といった心を育てる教育にも力を入れているということが分かった。勉強して知識を得て学力をつけていくことも大切なことであるが、それだけでは生きていく上で苦しいもったいないと思う。学力をつけると同時に、様々な人と関わり、意見を交わし、たくさん考えて、行動するということを経験し、人間力を高めていくことも必要であろう。ESDは持続可能な未来にむけて、価値観・行動・ライフスタイル・文化の変容を引き起こすための教育である。韓国も日本も、ESDに取組み、持続可能な未来について対話し共に考え、勇気をもって少しずつ歩んでいければ良いと思う。また、特別支援教育についても、インクルーシブ教育を進めつつも、分離教育も並行して進めているという日本と同じような韓国の現状を知ることができた。インクルーシブであろうと分離であろうと、どちらにしても障害者が

生き生きと過ごすことができ、社会の一員として生きがいをもって生活できる、障害の有無に関係なく共に認め合い助け合いながら過ごすことのできる共生社会の構築に向けて、今後もESDに取り組んでいきたいし、韓国や諸外国とも情報を共有していきたいと改めて感じた。様々なことを考えることのできた有意義な一週間であった。

【今後の活動予定】

- 韓国についての授業を行う
- 職員会議にて研修報告を行う

「世界は繋がっている」

B-08 仲田 郁子

担当しているJRC部の生徒が、私の訪韓中に市内の青少年主張大会で発表したスピーチのタイトルが、この「世界は繋がっている」であった。私たちの幸せが世界の幸せと繋がっていることを認識して、募金やフェアトレードなど、できることから取り組もうという内容であったが、彼女は見事優秀賞を受賞した。

私たちの日々の暮らしは、必ず世界のどこかの生産者と繋がっている。誰もが幸せな生活を送れるように、毎日の生活を大事にする意欲を育むのが、私の授業の目標の1つであるが、同時にそれは、人とつながる力を育てることを重視する本校のESDの目標でもある。

今回の韓国訪問によって、隣国との繋がりをあらためて強く感じることができた。時差がなく、気候も似ている。韓国料理といえば、キムチや焼肉ばかりが有名であるが、学校給食で見た日常の食事は、ご飯と汁物を中心に、いくつかの副食を組み合わせた栄養バランスのとれたもので、明らかに和食と通じるスタイルであった。

韓国の生徒の明るい人懐こさは、目立つことを嫌う日本とは少し違いがあるようにも見えたが、指導する先生方の子どもたちのへの思いには、違いがあるはずはなかった。学校を訪問して授業を通して韓国の生徒と触れ合い、先生方と交流を深め、さらに家庭を訪問してホストファミリーと触れ合うことで、確かな繋がりを再認識できた濃密な1週間だった。繋がることは、大きな喜びである。これからさらに新たな繋がりを構築していくことが、私の今後の大きな目標である。

【今後の活動予定】

- 文化的背景が意識できる生活行為の授業を行う
- 保護者と協力したESD活動を考える

韓国教育から学んだこと

B-09 大江 隆喜

今回の事業では多くの気づきと貴重な経験をさせていただいた。韓国への印象は熾烈な受験戦争や不安定な日韓関係などあまりいいイメージではなかった。しかし、訪韓中はそれらを感じることは全くなく、マスメディアなどから得る情報の不正確さも実感した。訪問した学校の児童生徒、教職員やホームビジットの受入家族、出会った多くの方々が親しみをもって「おもてなし」の心(歓迎横幕や日本語での資料、卓上氏名、茶菓子等細部にわたり)で接してくださることに感謝、感激。言葉や習慣文化は異なれど交流することの重要性を改めて感じた。同時に心から、「とても礼儀正しく、親切で懐の深い国民。また治安もいい国だ」と伝えることができることに大きな収穫と自己変化があった。似て非なる、近くて遠い日韓。両国が今後よりよい発展を遂げていくには教育の果たすところは大きいと思われるが個々の小さな積み重ねが、友好へとつながることを痛感させられた。今回のプログラムで知り得たことを子供たちに伝えることでさらに韓国や諸外国、異文化に興味関心を持ち、自文化を再認識しながら、多文化共生への理解や交流の一助となれるよう取組を加速していきたいと強く感じる。まずはできることやれることから確実に始めていきたい。プログラムを通して得られた大切な出会いを一過性のものとすることなく校種や地域は違えど今後も「つながる」ことでESDやGCEDの普及推進等に大きく寄与できるものと確信している。

【今後の活動予定】

- 教職員や生徒、保護者に対して、韓国の教育事情の紹介や今回の訪韓の報告を行う

10年後の出会いのために

B-10 小川 宏明

今回のプログラムでは3つの学校を見学させていただき、また大邱広域市教育庁のお話を伺うことが出来た。心を尽くして迎えてくれた生徒の皆さんの笑顔と、そのときの自分の感激の気持ちがいまでも思い起こされる。

このプログラムに参加してまず感じたことは、教員はやはりどの国でも熱心であるということであった。韓国の先生方もそうであった。もちろん熱意の点では、日本の教

員も負けてはいない。ただ「教育」なる言葉にどのような内容を盛るのか。部活ひとつとっても韓国の先生方はより教科指導に専念できる環境のようであった。

次に、プログラムの途中から、「自分がいま教えている生徒たちは、10年後、この韓国の生徒たちとどのように付き合っているのだろうか」。そんなことを漠然と考えるようになった。韓国は様々な面で自分が思っていたよりも近かった。10年後はもっと近づいているのだろう。同じ会社の同僚、もしくはもっと身近に、同じマンションの住民や同じ保育園に子どもを通わせる保護者同士として、などなど。現在よりもっと韓国をはじめとする、特にアジアの人たちは身近な存在となっているのだろう。お互いがよきパートナーとして、自分はいま目の前にいる生徒たちをどのように育てていかなければならないのか。そんな視点を強く意識させてくれたプログラムであった。

【今後の活動予定】

- 教職員を対象とした報告を行い、情報を共有する

韓国ユネスコスクールに学ぶ 「地球市民教育」

B-11 小椋 ももこ

今回訪問した各学校では、ESDとGCEDの特色ある教育活動に取り組んでおり、とりわけGCEDにおいて、現在韓国教育部で推進している「幸せ教育」の実践例として大変参考になった。この幸せ教育を達成するために、各学校では「自由学期制」を導入している。生徒主体による学びの手法は、日本のアクティブラーニングの類似性を感じた。

ソウル市にある私立善一女子中学校では、3年生対象の進路プログラムの発表会が講堂で行われており、壇上では発表者の生徒が堂々とプレゼンテーションを行っていた。聴講生徒も全員、視線がステージに向けられており、質問や拍手が活発に行われ、指導者(教員)による介入が感じられず、「生徒主体」による学びの集大成が表れていた。

ソウル市より4時間南下した大邱市、私立源花女子高等学校では、他言語授業の充実が印象的であった。1年次に英語、2年次に日本語、3年次に中国語を選択することができる。校内の廊下窓には、定期的にプラカードが掲示しており、韓国語、日本語、中国語、英語による挨拶や簡単な会話文が一枚に掲載されていた。日頃より生徒が他言語を視覚的に取り入れることで、言語に対

する苦手意識を持たせることなく、実用的であると感じた。そして、ESDやGCED以外の両学校の共通点が「愛国心」である。見学した全ての教室前方に、韓国国旗が掲示されていたのが象徴的であった。ユネスコスクールに限ったことではなく、韓国内の学校教室に掲示されているのは珍しくないと同った。源花女子高等学校の建学理念は「国を愛し、民族を愛する」である。母国を愛し、誇りをもたせ、「国家」と「国民」をより身近に育ませることも地球市民教育の一環であると、今回の視察で学んだ。

【今後の活動予定】

- 韓国の生徒の優れた英語力に関して教職員や生徒たちと情報を共有する

知行合一

B-12 杉谷 輝

「知行合一」は明の儒学者、王陽明が始めた陽明学における命題の一つである。「知ること(知)は行為(行)の始めであり、行為は知ることの完成である」、「知っているのに行為に移さないのは本当の「知」ではない、知らないのと同じである」などと解釈される。私は訪韓するのは3回目、韓国についてある程度理解しているつもりだった。しかし、実際に韓国の先生や生徒と言葉を交わし、プログラム中に直接五感で感じたことは、これまでの私の「知」を次々に上書きしていった。本当の「知」の獲得のために「行」に移したいという欲求がごく自然に湧いてきた。また、一緒に参加した多くの先生方からも、強烈な刺激を受けることができた。見習うべき考え方や人間的な魅力はもちろん、後から振り返ると「知行合一」を実践しておられる先生に多く出会えたことは私にとって財産である。このプログラムで、私のこれからの教育活動に影響を与える経験ができたことは間違いない。このような経験をしている教員だからこそ、生徒に伝えることができる、伝えなければならないことがたくさんあると思う。この一週間の経験では、韓国の一部を知ったに過ぎない。しかし、本当の「知」のために行動することで、さらに新たな「知」への欲求が湧いてくるだろうし、これらの過程で私自身が変容していくことも本当に楽しみである。

【今後の活動予定】

- 今回の経験を生徒や教職員と共有する
- 各学科の生徒に対して韓国文化等の紹介を行う
- SGHの取組みとESD・GCEDの取組みの関連付け

個人レベルでの交流を土台に

B-13 當麻 進仁

プログラム全体を通して、先方の先生方との個別の話し合いが最も有意義であった。それぞれが抱えている問題点や疑問点を直接話し合える機会はこのプログラム以外にはないと思う。公式プログラムでは時間の制約から数名による質疑応答に限られたが、真摯に質問に答えていただき、大変感謝している。参加者の多くが深い話し合いの機会を模索していたようであるため、教育委員会への訪問や学校訪問ごとの情報交換会は非常に貴重なものであった。加えて訪問地毎に催される歓迎晩餐会も情報共有の場として大変意義のあるものであった。

提案であるが、限られた時間の中で更に濃い話し合いをするためにも、情報交換会を分科会形式にするのは如何だろうか。この形式にすれば、先方を始め多くの参加者に発言の機会が与えられるとともに、名刺交換の時間も設定できる。各グループに記録者を一人設置することで、報告の内容も充実したものになるのではないかな。いずれにせよ、個別の意見交換の場面の拡充が今後に向けての有意義な話し合いをもたらしものと考えているため、前述のような場面設定には非常に感謝している。

【今後の活動予定】

- ICTを用いた生徒レベルの共同研究

人とのつながりこそ、 日韓の持続的な成長をうみだす

B-14 高橋 和希

今回のプログラムでどれだけの人と握手を交わしただろうか。そこに私は、相手への「よろしくお願いします」、「ありがとうございます」、「この出会いを胸に刻みます」などという思いをこめた。握手をした中の一人に、源花女子高校の一人の高校生がいる。その生徒から私は、歓迎と校内の案内を受けた。その生徒は、私を丁寧に案内するだけでなく、私のつたない英語にも笑顔で一生懸命返してくれた。そして最後に、「ここで授業にもどります。カムサハムニダ」と言って授業に戻った。しかし、源花女子高校の閉会式を終え、部屋を出ると、そこにはその生徒が日本語で書いたメッセージを手を持ち、立っていた。

たまたま案内を担当することになった日本の教師に対して、誠実なおもてなしと、そして、最後に日本語でのメッセージをわざわざ私に渡しに来てくれた。私は大きな喜びを感じた。歓迎の際に、精一杯の英語で話したそのやりとりや関わりがここでつながるのかと思った。

今回、企画や運営、そして学校訪問やホームビジットなど、多くの韓国の方に優しさもらった。私もそれに応えたいと思い、積極的に活動した。これから私は、ESDを推進していきたい。しかし、物事をよくしたり、進めたりするときには、自分だけではできない。人とのつながりこそ、両国の持続的な成長をうみだすと感じた。

【今後の活動予定】

- 韓国の河川汚濁について知り、実際に地区の川の清掃などを行い、韓国教職員に活動を紹介する
- 今回出会った韓国教職員の方々と交流を続ける

「小さな川だけであると枯れる 小さな川 が何本も交わるから流れるのである」

B-15 高橋 俊輔

ESD や GCED の知識を頭に入れてから、本プログラムに参加した。しかし、難しく考えすぎず、未だ知らないたくさんの人と話してみたい、知らないことをもっと知りたいという探究心こそがESD や GCED に繋がっていくということに気づくことができた有意義な時間となった。

源花女子高等学校では、熱烈な歓迎を受けた。伝統民族衣装で迎えてくれる生徒、ブラスバンドや合唱で迎え入れてくれる生徒、校舎の窓から手を振りながら、覚えてた日本語で「こんにちは」、「ありがとう」、「げんきですか」と私たちに興味を持って関わろうとしてくれる多くの生徒たちに感銘を受けずにはいられなかった。私は、ここで初めて、「もてなされる喜び」と「もてなされた後の感謝」を知った。校長先生の話で、「小さい川だけであると枯れる 小さい川が何本も交わるから流れるのである」という言葉が特に印象に残った。互いに探究心、好奇心を持って関わり、その関わりから学ぶことこそが大切なことであると実感した。

善一女子中学校では、私は文化授業を展開した。青森県の先生と共に準備をし、中学生に授業を展開できたことは貴重な体験であったと感じている。生徒が笑顔で大きな声を出して踊っている姿を見て、私は楽しくてたまらなくなり、韓国の中学生や日本の尊敬できる先生との関わりこそが「交流」であると強く感じた。

【今後の活動予定】

- 今回のプログラムの報告
- カンボジアの障害者施設の先生との意見交換会
- 今回出会った全国の教職員との交流を継続する

「韓国での発見や気づき」

B-16 高畑 啓一

最も印象に残っていることは、いろいろな場所で、多くの先生方や生徒たちに歓迎をしていただき、生徒主体の興味深い活動が行われていたことである。学校訪問で、とても多くの生徒や先生方に迎え入れていただいたときには、とても驚き、嬉しかったのを覚えている。

善一女子中学校における「日本文化授業」では、サブとして参加させていただき、ともに「よさこい踊り」をしたが、生徒たちはとても積極的に参加しており、見よう見まねで一生懸命踊りを踊り、日本の文化を体感している様子がそこにあった。源花女子高等学校では、音楽、日本語、美術などの授業を見学させていただいたが、音楽はただ歌うだけではなく、さまざまな国の文化を学習できるようになっているなど、どの教科も工夫されており、生徒がやはり生き生きと活動していた。

訪韓中は語りつくせないほど、さまざまな発見や気づきがあった。学校のこと、授業のこと、生徒の様子、先生の連携……。今回の経験を生かし、生徒が自分の考えや思いを積極的に発信でき、また、いろいろな体験ができるよう、今後の授業や指導のあり方を考えていきたいと思う。

【今後の活動予定】

- 授業で、韓国の政治体制や文化を伝える
- ユネスコスクールの考え方を授業に取り入れる

百聞は一見にしかず

B-17 田中 俊介

今回の研修に参加させて頂き、聞くのと見るのは全く違うのだと改めて気づかせてもらう研修となった。善一女子中学校、源花女子高等学校、大邱広域市教育庁訪問などさまざまな訪問先に加えて、多くの日本教職員との交流は私の教育人生に大きな影響を与えるものとなった。特に源花女子高等学校、大邱広域市教育庁の訪問は衝撃的で、教育への熱意にとっても影響を受けた。学校も

そうだが、市をあげての教育活動という考えは、私にとっては新鮮だった。それに加えて、今回のプログラムの仲間である日本教職員との出会いは非常に得難いものであった。それぞれの学校の取り組みや経験など、全てが学びであった。日々の生活に追われて、外の世界に目が向いていなかったため、1週間という期間を頂けたのはとても有難かった。今後個人としても、学校としてもユネスコの理解を深め、今回の学んだ内容を少しでも生かしていきたい。

【今後の活動予定】

- 読書活動、保護者の子ども教育能力養成、文化芸術活動に力を入れる。
- ESDなどの研修や交流会イベントに参加する

日本文化授業のすすめ

B-18 徳橋 佑哉

韓国の教育とは、一体どのようなものだろうか。グローバル化が進むにつれ、各国が実施している教育プログラムに関心が向き、できれば現場を視察し、素晴らしいプログラムは日本でも活用し、国際人の育成に貢献できればと考えていた。今回の訪韓に際しては、日本文化授業を担当し、韓国の生徒と直接学び会う機会に恵まれた。訪韓1ヶ月前、「よさこい」を踊ることも、韓国語を話すこともなかった。しかし、韓国での日本文化授業実施決定をきっかけに、高校の理科教員が人前でダンスを踊り、通訳を介することなく韓国語で授業を実施するまでに成長した。人は努力すれば、短時間で急成長できることを証明したことになる。日本文化授業が日本人教員へ与える影響力は計り知れないものがあり、次回、本プログラムに参加したいと考えられている先生方は、ぜひ授業担当者になることをお勧めしたい。韓国の生徒が持っている情熱を肌で感じるができるだろう。また、韓国の生徒は、第4次産業革命に適応するため、単に暗記中心の詰め込み教育から脱却し、情報を活用し、創造性に富んだ人材になるための教育を受けている。日本以上にICT教育が充実しており、活発な生徒たちと共に授業を作り上げることができれば、自身の知見が広がることは間違いない。

【今後の活動予定】

- 得た情報を、学年集会などで生徒たちに伝える
- 理科部会の研修会で、韓国の教育の現状を伝える

人とのつながりを大切にし、堂々と自己表現できる生徒育成を目指して

B-19 友光 里恵

日本の教育活動ではアクティブラーニングの視点からみた主体的・対話的な深い学びを実践していくことが求められ、生徒の思考が深まったり変化をしていくこと、そして最終的には主体的に判断し、表現していくことが求められる。私は、訪韓前に、「韓国ではどのような協働的な活動を行っているのか、その中で個の考えを深めていくような活動はあるのか」を中心に視察させていただくことを決めていた。3 日目に訪問させていただいた大邱教育庁では、暗記中心の教育や、競争意識中心の教育からの変革を行い、「幸せ力量教育」を推進していた。幸せは個人の潜在的な才能と特製を探り、磨くことによって開発されるスキルであり、周りとのポジティブな関係を形成するための関係回復教育を行っていることを話されていた。その大邱にある源花女子高等学校に伺い、見せていただいた授業では、国際的な視点、自国の文化を尊重する思いを、「ESD」の視点を踏まえ、それぞれの生徒の個性や考えを引き出しながら、そして、生徒自身が恥ずかしながら、思い切って自己表現する姿を目の当たりにした。周囲の生徒と切磋琢磨しながら、活動をしている姿に、これから日本の教育で求められる「対話的・主体的な深い学び」を通し、育てていきたい生徒象であると感じた。

訪問する先々での温かい歓迎ぶり、そして、ホームビジットでは、ご家族 3 人に大変に温かく迎えていただいた。日本語教師をされている方であったが、ご主人が調理してくださった料理を囲み、互いの中学校の様子や教育事情について語り合うことができた。また、スーパーにも連れて行っていただき、日常生活を垣間見ることができた。この一週間の経験は、今後の教師生活において財産となる。ぜひ、「人とのつながりを大切にし、堂々と自己表現できる生徒」を育てていきたい。

【今後の活動予定】

- 行内研修でのプログラムの報告
- 家庭分野の授業の中に、国際的な視点、自国の文化を尊重する思いを、「ESD」の視点を踏まえ、取り入れる

Think Globally, Act Locally.

B-20 津山 直樹

韓国のユネスコスクールを中心に学校現場・行政機関・地域や家庭というさまざまな視点から韓国教育の現状を肌で感じることができた。その中で生徒を中心にしてグローバルな文脈をつくりだして授業実践をしていた点に着目したい。源花女子高等学校で見学した日本語の授業を取り上げる。「日本の自己紹介」がテーマで、名刺交換が内容であった。日本人が授業見学に来ることを想定して、内容を選択し、実際に日本人と名刺交換を試みるという体験を取り入れていた。「グローバル化」は、抽象概念であり、授業で生徒に伝えるのは容易なことではない。しかし、日本の文化を理解するために実際に名刺交換を試みるという体験を通して、「異質な他者」との関係を考える契機としている点は、ESD の流れを汲んだ GCED の萌芽であると感じた。このように日本語という教科の特性を生かしながら、グローバルな視野で授業実践を展開することは、人の移動が激しくなっている現代においてはどの国にも求められることである。つまり、ローカルな課題を取り上げることが、グローバルな課題を考える契機になるという教育のあり方が求められるということである。

これからの日韓関係を考える上で重要なことは、文脈に基づいた“Local”を考えていくことが、“Global”とつながっているということを認識させられる教育を模索していくことである。“Glocal”な視座を持ち、多様性を意識しながら、ホリスティックに教育を考えていくことが一層求められる。

【今後の活動予定】

- 日本国際理解教育学会のような日韓の相互理解に力を入れている学会で発表する

誇り

B-21 吉川 守

今回の韓国訪問プログラムの共通のキーワードは「誇り」であると私は考えている。それは、韓国の教職員、生徒、行政の方とお話をする中で、また接する中で、如実に感じたものである。その理由として次の3つをあげる。

①生徒達。授業に対して積極的な姿勢で臨んでおり、自己表現、自己主張ができています。また、日本教職員と

もすぐに打ち解けることができ、オープンマインドな気質を持っている。それは自尊感情が高く、自己肯定感が強いからではないかと考える。②教職員。自分の学校の目標や理念について明確に答えることができており、そのことに沿った教育を実施している。また、学校の施設や設備についての私達への説明が、大変誇らしげであった。さらに、生徒への愛情が強く、生徒の学習に徹底的に関わる姿勢がある。③国民として。ホームビジット先では、韓国と日本の歴史や文化について夜遅くまで話をした。「日本との関係については、まだまだ課題が残っているが、韓国人として日本の方一人ひとりとつながらなければならない」と話していた。以上の事から、「自分の学校、生徒、住んでいる地域、国への誇り」を韓国の方々を持っていると考える。

私は、今後、生徒に、自分の学校、住んでいる地域を誇りに思う、そして、自分を誇りに思うことができる指導を進め、世界に貢献できる生徒を育成していきたい。

【今後の活動予定】

- 各研修会などで、本プログラムで得た情報や自分が体験し感じたことを先生方や保護者、地域の方に伝える

韓国の学校でわかったこと

B-22 湯藤 俊吾

韓国の生徒が教師に対して従順であることはある程度理解できていたが、学校見学の中でそれは充分観察されたと思われる。日本と同様に教師主導の授業であることは普通科の授業参観がないことで憶測できるが、書道・日本語授業・音楽と生徒が受験科目と関係ない部分の参観であることはその理由にある。韓国での進路指導や生徒指導(韓国では生活指導になる)についての日韓の相違や議論がなされないことはその意味を知ることができない。日本の中学校において、学校からの圧力はほとんどなく、生徒はどんな暴言や暴力・いじめがあったとして転校や留年・退学は存在しないが、韓国の義務教育段階でもそれらは機能していることは学業中断率で知ることができる。この学業中断率という言葉自体をどれほどの参加者が理解していたかは知ることができないと思われる。ここに韓国教育の鋭さがあり、まったく日本とは違う環境にありながら、我々を迎えた笑顔の根底にあることを知っていただきたい。日本と韓国の学校の状況はまったく異なるが、同じことを追求している韓国の学校

は日本のように行かないと感じた。これは児童生徒にとって厳しい状況にあることは日本をみれば易いにわかる。

【今後の活動予定】

- 韓国の教育制度の良い点を取り入れてる
- 生徒たちに国際交流プログラムへの参加を促す



随行者のコメント

国際連合大学サステナビリティ高等研究所
事務局長 古田 知美

「日本人と対話したのは初めてです」。源花女子高等学校でチマチョゴリを着て案内してくれた学生が、流暢な日本語で言った。今回、訪問団を受け入れてくださった教育機関はどこも、全校を挙げて準備をし、大歓迎で迎えてくださった。これら日韓の関係者の多大なるご協力のもと、官公庁や教育機関の見学、教職員や生徒との交流、授業体験など充実した訪問となった。関係者の皆様には、改めて感謝申し上げたい。この訪問を通じて、訪問団が得たものは大きかったが、一方、多くの児童生徒らにとって、私たちが「初めて接する日本人」となることに改めて気づかされ、光栄に思うとともに、責任も感じた。善一女子中学校での文化授業を初め、参加された先生方の熱意とご努力で、訪問先の児童生徒や教職員の方々にも、日本の素晴らしい教育や文化、心が伝わったことと思う。今後とも、この事業が日本と韓国の教育交流・友好関係の推進に繋がっていくことを期待したい。

文部科学省

初等中等教育局初等中等教育企画課

地方教育行政専門官 久芳 全晴

今回の韓国への訪問は、大変学びの多いものとなった。教育行政機関や学校、文化施設等を訪問し、先進的な取組をはじめとした韓国の教育事情を学ばせていただき、韓国の教育から学ぶべきところ、そして日本の教育の良いところを肌で感じる事ができた。そして、日本の教職員による授業を受ける生徒の姿を見て、国が違っても、時代が進んでも、教育の原点は変わらないという実感を再確認した。未来そのものである子供たちを教え育む教職員が国を超えて交流し、学び合うことはまさに国と国との関係の土台を作っていくことである。学習指導要領が新しくなり、学校現場においても国際化への対応がこれまで以上に求められている今だからこそ、本事業の重要性はより大きなものになっている。今後とも、本事業が日本と韓国

の教育交流の推進、そして両国の発展、ひいては世界平和に繋がっていくことを期待したい。

文部科学省 大臣官房国際課

企画調査係／調査係 長島 和毅

韓国の最先端の教育現場視察や教育関係者との交流を通し、韓国の教育について学ぶことができた。同時に、日本の教育について客観的に見つめ直すことができた貴重な1週間となった。特に韓国のESD活動事例や忠清北道教育庁の革新的な教育環境づくりは非常に興味深く、こうした取組みの一つひとつが児童生徒の笑顔につながっているのだということを学んだ。驚いた点としては、陽青高校に訪れた際に、高校生が第二外国語を勉強していたことである。現にホームビジットで訪れたご家庭の子は日本語が堪能で、まるで日本人と会話をしているかと思うくらいであった。全体を通して、受け入れ側の学校・団体・ご家庭がおもてなしの心をもって我々訪問団に接していただき、心地よく視察することができた。今回の交流が日本教職員にとって韓国との交流のスタート地点となり、日韓の教育分野におけるネットワークが広がっていくことを心から期待している。

ACCU 人物交流部

事務専門員 齋藤 盛午

10年以上にわたり、毎年韓国を訪問しているが、韓国社会の変化のスピードには毎回驚かされる。本プログラムの担当者として随行者のは今回で3回目となるが、教育においても韓国がめまぐるしい速度で変化していることを体感した。数年前はまだ手探り状態のように感じられたGCEDは、着実に教育現場に根を下ろしつつある。また、2016年から全面施行となった自由学期制も、今回の訪問を通して多くの好事例が共有された。GCEDの好事例として特に印象深かったのは、安川小学校での授業見学である。児童労働の悲惨な現状について子どもたちに学習させるため、「休んではいけない」、「(作業に集中するため)顔をあげてはいけない」など過酷な条件を与え、工作をさせるという内容であった。作業のあとに感想を共有することで、実際に今、世界で起きている児童労働問題に目を向けさせる、当事者の立場になって考えさせる

いう内容であった。見学した日本の先生方からも、この授業が非常に印象的であったとの感想をいただいた。安川小学校の授業をはじめ、期間中には多くの好事例が紹介されたが、それらが日本の学校、教職員、または児童生徒に共有されることで、本プログラムが我が国の教育のさらなる発展に寄与できることを願っている。また、期間中に知り合った両国の教職員が、今後も交流を続け、両国の友好促進に貢献してくださることを期待している。

ACCU 人物交流部

事務専門員 河口 枝里子

この度、本プログラムに随行し、参加する日本の先生方がプログラム中に気が付くところは違うなど日々感心するばかりであった。それは、時間割であったり、生徒指導の掲示板であったり、トイレであったり。プログラム期間中、日々学校訪問を重ねるうちに、日本と韓国の違いや共通点に気付き、また、様々な疑問を持って帰国されたことと思う。特に、最新の施設が整った世明学校(特別支援学校)の恵まれた教育環境は、驚きのひとつであった。保護者たちからの40年にも渡る要望の結果、ようやく設立されたというが、韓国の特別支援教育における大きな成果であろう。一般校における特別支援学級がまだそれほど普及していない韓国において、このような特別支援学校への入学希望者数は、定員を上回っており、入学を希望しているにもかかわらず、通えない子どもたちもいるという現状も聞くことができた。

1週間という限られた時間で、すべての気付きに対する疑問を消化するのは難しかったことと思うが、その大切な「気付き」が、自身が変わるきっかけ、韓国について考えるきっかけ、日韓交流のきっかけとなることを願うと共に、それらのきっかけを教育現場で子どもたちへと還元していただきたい。

◆資料 1.

韓国政府日本教職員招へいプログラム

(2017 年 7 月 11 日～7 月 17 日:韓国/ソウル、忠清北道・大邱、仁川)

実 施 要 項

1. 背景

2000 年 3 月、戦後の文部大臣として初めて、中曽根弘文文部大臣(当時)が訪韓し、文龍鱗(ムン・ヨンリン)韓国教育部長官(当時)との会談でなされた招請に基づき、文部科学省の協力のもと、公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター(ACCU)は、2001 年より韓国から初等中等教育教職員を招へいするプログラムを実施してきました。当初は「ACCU・ユネスコ青年交流信託基金事業」として、2003 年からは「ACCU 国際教育交流事業」として国際連合大学の委託を受け、これまで 1,877 名の韓国教職員が日本を訪問し、我が国の教職員との交流を深め、日韓両国間の相互理解と友好の促進に貢献してきました。

2003 年からは上記プログラムと対をなすものとして、毎年 10 名程度の日本教職員を韓国へ派遣してきましたが、これら交流事業の成果が韓国政府に高く評価されることとなり、2005 年からは、韓国ユネスコ国内委員会(KNCU)による招へいプログラムとして参加人数を 20 名へ倍増し日韓教職員相互交流が実施されました。2008 年のプログラムからは、招へい人数がさらに倍増され、さらなる交流の発展を目指すこととなりました。

2. 目的

- (1) 韓国の初等中等教育における教育制度および教育課題への理解を深める。
- (2) 韓国における持続可能な開発のための教育(ESD)と地球市民教育(GCED)などの好事例を探る。
- (3) 教育経験を交換する機会を提供し、日韓両国の教育の質を高める。
- (4) 日韓教職員のネットワーク構築・強化に寄与する

3. 活動内容

- (1) 小・中・高・特別支援学校や教育施設訪問を通じて、持続可能な開発のための教育(ESD)や地球市民教育(GCED)を含む韓国の最新の教育政策・現状の視察
- (2) 訪問先における韓国の教職員・児童生徒との交流、日本の文化や ESD の紹介
- (3) 世界遺産見学やホームビジットを通じた、韓国文化の理解

4. 日程概要

出発前オリエンテーション:2017 年 7 月 10 日(月)

プログラム実施期間:2017 年 7 月 11 日(火)～7 月 17 日(月) (7 日間)

日付	日程	訪問先	活動
7 月 10 日(月)	前日	成田近郊	前泊
7 月 11 日(火)	派遣第 1 日目	成田/ソウル	ソウル到着、韓国現地オリエンテーション 開会式、韓国の教育制度紹介、歓迎晩餐会
7 月 12 日(水)	派遣第 2 日目	ソウル	ユネスコスクール訪問
7 月 13 日(木)	派遣第 3 日目	チュンチョンブクト 忠清北道 ・大邱	教育庁・ユネスコスクール・教育施設等訪問
7 月 14 日(金)	派遣第 4 日目		韓国教職員・児童生徒との交流、歓迎晩餐会
7 月 15 日(土)	派遣第 5 日目		地域遺産訪問、情報共有会、ホームビジット

7月16日(日)	派遣第6日目	インチョン 仁川	報告会、閉会式
7月17日(月)	派遣第7日目	仁川/日本	仁川出発、帰国(東京／大阪／福岡へ)

5. 参加者

下記の教職員、随員併せて50名を参加者とする。

- (1) 2016-2017 年韓国教職員招へいプログラム受入れ教育委員会または受入れ校が推薦する教職員
- (2) 2017-2018 年韓国教職員招へいプログラム受入れ予定の教育委員会が推薦する教職員
- (3) 過去5年韓国教職員招へいプログラムの受入れがなく、今後の受入れに高い関心を持つ、管轄にユネスコスクールを有する教育委員会の担当部署職員
- (4) 公募により選抜された教職員
- (5) 国際連合大学、日本ユネスコ国内委員会を含む文部科学省、および ACCU の職員

6. 参加資格

- (1) 日本国民であること。
- (2) 所属長から推薦を受けた、教育教職員(教育行政職員を含む)であること。
- (3) 健康で、オリエンテーションを含めたプログラムの全日程に参加が可能であること。
- (4) Eメールを用いて円滑に連絡ができること。また、Microsoft Word/Microsoft Excel などの簡単な操作ができ、所定のフォーマットに必要情報を入力し提出できること。
- (5) 過去の本プログラムに参加がないこと。

また、①ユネスコスクール、ESD、GCED の活動に携わっている者、または高い関心を持っている者、②将来にわたり韓国との具体的な教育交流の推進に寄与できる者が望ましい。

7. 評価と報告

(1) 派遣期間中

- 評価票記入(日本語または英語で記入し、ACCUを通してKNCUへ提出。)
- 報告会への出席・グループ毎の発表。

(2) 帰国後

- ① 参加者は帰国後、所定の報告用紙により ACCU に報告書(日本語)を2回提出する。

	提出期限	内容
第1回	2017年7月28日(金)12:00	主にプログラム中の成果について報告。 ※ACCUが発行する実施報告書へ掲載予定。
第2回	2018年3月2日(金)12:00	主に帰国後の取組みや成果について報告。

- ② 各グループは、所定の期日までにグループ報告書(日本語)を ACCU に提出する。
(ACCU から KNCU に送付後、KNCU が韓国で発行する実施報告書へ掲載予定)

8. 旅費等諸経費

(1) KNCU が下記について負担する。

- 往復航空運賃: 日本と韓国の国際空港間のエコノミークラス航空券
- 韓国内の移動に係る経費、宿泊(シングルまたはツインルーム)、食事: 但し、公式行事のない日の夕食については、支給される夕食代(1日当たり 20,000 ウォン)から参加者が支出することとする。

(2) ACCU が下記について負担する。

- 日本国内交通費 (ACCU 規定に準ずる)
 - ① 自宅最寄駅と事前オリエンテーション会場(東京)の往復交通費
 - ② 出発前日の自宅最寄駅から宿泊先までの交通費
 - ③ 出発日の宿泊先から成田空港への交通費
 - ④ 帰国日の到着空港からの自宅最寄駅までの交通費の定額
- 出発前日(7月10日)の宿泊

注 1: オリエンテーション開始時刻に到着可能な交通手段がない場合、前日(6月9日)の宿泊費を支給する。また、終了後、当日中に居住地に到着可能な交通手段がない場合に限り、当日(6月10日)の宿泊費を支給する。

注 2: プログラム終了後、帰国日(7月17日)中に居住地に到着可能な交通手段がない場合に限り、当日(7月17日)の宿泊費を支給する。

注 3: 本プログラムには公務にてご参加を前提としているため、日当は各所属先での負担とし、期間を通して ACCU から日当は支給しない。

(3) 各参加者は、下記について負担する。

- 海外旅行損害保険: 各参加者は、プログラム期間中の万一の事故に備え、出発前に必ず各自の責任において、海外旅行損害保険に加入しておくこと。
- 上記(1)、(2)以外の諸経費

(4) 旅券と査証について

- 旅券(パスポート): 入国時に3ヶ月以上有効なパスポートを各自で準備すること。
- 査証(ビザ): 一般旅券の場合は、ビザの取得は不要。

9. 通訳

韓国国内でのプログラム期間中は日本語と韓国語間の通訳を配置する。

10. このプログラムに関する照会先

公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター (ACCU)

人物交流部 (担当: 齋藤・河口、部長: 進藤)

〒162-8484 東京都新宿区袋町6番地 日本出版会館

TEL: 03-3269-4498 FAX: 03-3269-4510

E-MAIL: accu-exchange_ml@accu.or.jp

プログラム日程

グループ A&B (ソウル) 2017年7月11日

1 日目	7月11日 (火)
9:25	東京成田空港出発
11:50	仁川国際空港到着
13:00-14:00	昼食
14:00	ソウルへ移動
15:20	ホテル到着及びチェックイン (世宗ホテル)
16:00-16:20	プログラムに関するオリエンテーション及び開会式 (世宗ホテル)
16:20-17:00	韓国の教育についての講義
17:00-17:30	韓国の ASPnet 紹介
17:30-18:00	休憩
18:00-20:00	歓迎晚餐会 (世宗ホテル)

グループ A (忠清北道) 2017年7月12日-15日

2 日目 /Day 2	7月12日 (水)
8:30	ホテル出発
9:30-14:00	安川小学校 (ユネスコスクール) (学校給食)
15:00	ホテル到着及び休憩
3 日目 /Day 3	7月13日 (木)
8:40	ホテル出発
12:00-13:00	昼食
14:40-15:20	ホテル到着及びチェックイン (グランドプラザ清州ホテル)
15:20	ホテル出発
16:00-17:30	忠清北道教育庁訪問 /
18:00-19:30	地域歓迎晚餐会 (グランドプラザ清州ホテル)
4 日目 /Day 4	7月14日 (金)
9:00	ホテル出発
9:30-13:30	陽青中学校訪問
13:30-16:00	陽青高等学校訪問(ユネスコスクール)
16:30	ホテル到着および休憩

5 日目 /Day 5	7 月 15 日 (土) /15 July (Saturday)
8:30	チェックアウト & ホテル出発
09:00-11:30	文化探訪
11:40-12:40	昼食
13:00-14:00	ホテル到着及びホームビジットの準備
14:00	ホテル出発(陽青高等学校へ移動)
14:00-15:50	評価会(場所: 陽青高等学校)
15:50-16:00	ホームビジットの対面式
16:00 - 20:00	ホームビジット
20:00	ホテルへ移動

グループ B (仁川) 2017 年 7 月 12 日-15 日

2 日目	7 月 12 日 (水)
8:30	ホテル出発
9:20-13:50	善一女子中学校訪問(ユネスコスクール)
15:00	ホテルへ移動
3 日目	7 月 13 日 (木)
8:30	ホテル出発
12:30-13:30	昼食
13:40-14:30	大邱国立博物館訪問
15:00-15:40	ホテルチェックイン及び休憩
15:40	ホテル出発(教育庁へ移動)
16:00 - 17:00	大邱広域市教育庁訪問
17:30 - 19:30	地域歓迎晚餐会
3 日目	7 月 14 日 (金)
9:20	ホテル出発
10:00-13:30	源花女子高等学校訪問(昼食: 学校給食)
14:00-16:30	世明学校(特別支援学校)
17:00	ホテル到着及び休憩
4 日目 /Day 4	7 月 15 日 (土) /15 July (Saturday)
8:00	ホテル出発
9:00-13:30	文化探訪及び昼食

14:40-14:30	ホテル到着及びホームビジットの準備
14:30 - 15:50	評価会
15:50-16:00	ホームビジットの対面式
16:00 - 20:00	ホームビジット

グループ A&B (仁川) 2017 年 7 月 16 日-7 月 17 日

6 日目	7 月 16 日 (日)
8:30	Group B チェックアウト & 仁川へ移動
9:00	Group A チェックアウト & 仁川へ移動
12:30-13:30	昼食
14:00-15:00	ホテルチェックイン (ハーバーパークホテル)
15:00-16:00	報告会 (ハーバーパークホテル)
16:00-16:30	閉会式 (ハーバーパークホテル)
16:30	休憩
7 日目	7 月 17 日 (月)
	帰国準備 / Preparation for Return
5:30	福岡行きの搭乗者ホテル出発 & 仁川国際空港へ移動
6:40	関西/成田行きの搭乗者ホテル出発& 仁川国際空港へ移動
8:00-09:20	福岡－福岡行き(KE787) / 大阪到着
9:35-11:20	大阪－関西行き(KE723) / 福岡到着
10:10-12:30	東京－成田行き(KE703) / 東京到着

**2016-2017年 韓国政府日本教職員招へいプログラム
参加者リスト**

<Aグループ>

1. 参加教職員(23名)

☆団 長: A-01 太田 かおり (OTA Kaori)

☆A-01	太田 かおり	OTA	Kaori	九州国際大学	教授
A-02	千葉 貴幸	CHIBA	Takayuki	気仙沼市立気仙沼小学校	教諭
A-03	藤丸 浩志	FUJIMARU	Koji	箕面こどもの森学園	教諭
A-04	平野 和香子	HIRANO	Wakako	青森県立三沢商業高等学校	教諭
A-05	細谷 邦弘	HOSOYA	Kunihiro	横浜市長永田台小学校	教諭
A-06	柏葉 昭人	KASHIWABA	Akihito	町田市立小山田小学校	教諭
A-07	加藤 芳恵	KATO	Yoshie	愛知県立三好高等学校	教諭
A-08	河西 透雄	KAWANISHI	Yukio	大阪市立晴明丘小学校	首席
A-09	児玉 岳	KODAMA	Gaku	池田町立池田中学校	教諭
A-10	圓山 裕史	MARUYAMA	Hirofumi	奈良市立飛鳥小学校	教諭
A-11	山方 貴順	YAMAGATA	Takanobu	奈良市立都跡小学校	教諭
A-12	佐久間 みのり	SAKUMA	Minori	札幌市立月寒小学校	教諭
A-13	水野 愛実	MIZUNO	Ami	池田町役場 教育委員会	主事
A-14	中間 貴之	NAKAMA	Takayuki	八千代市西高津小学校	教諭
A-15	中田 望希	NAKATA	Miki	金沢市立兼六中学校	教諭
A-16	西川 有紀	NISHIKAWA	Yuki	八千代市立大和田南小学校	教諭
A-17	大和田 智子	OWADA	Satoko	福島県福島市立渡利小学校	教諭
A-18	菅谷 忠由	SUGAYA	Tadayoshi	千葉県教育委員会	班長 兼 社会教育主事
A-19	戸田 拓人	TODA	Hiroto	羅臼町立羅臼幼稚園	教諭
A-20	戸ヶ瀬 裕貴	TOGASE	Yuki	八千代市立みどりが丘小学校	教諭
A-21	上重 卓広	UESHIGE	Takuhiro	山口市教育委員会	社会教育主事
A-22	山崎 貴雄	YAMASAKI	Takao	高知県立高知東工業高等学校	教頭
A-23	吉元 祐介	YOSHIMOTO	Yusuke	奈良市教育センター	室長

2. 文部科学省同行(1名)

A-24	長嶋 和毅	NAGASHIMA	Kazuki	文部科学省	係員
------	-------	-----------	--------	-------	----

3. 事務局(公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター)(1名)

A-25	齋藤 盛午	SAITO	Seigo	公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター	人物交流部
------	-------	-------	-------	----------------------	-------

2016-2017年 韓国政府日本教職員招へいプログラム 参加者リスト

〈Bグループ〉

1. 参加教職員(21名)

B-01	坏 淳子	AKUTSU	Junko	日立市立十王中学校	教諭
B-02	藤野 明彦	FUJINO	Akihiko	東京都立杉並総合高等学校	主任教諭
B-04	平尾 京一	HIRAO	Kyoichi	奈良市立若草中学校	教頭
B-05	市橋 菜津美	ICHIHASHI	Natsumi	大阪府立能勢高等学校	教諭
B-06	黒岩 ゆい	KUROIWA	Yui	千葉県立国分高等学校	教諭
B-07	森 裕紀子	MORI	Yukiko	千葉県立桜が丘特別支援学校	教諭
B-08	仲田 郁子	NAKADA	Ikuko	千葉県立流山おおたかの森高等学校	教諭
B-09	大江 隆喜	OE	Takaki	沖縄県立八重山高等学校	教諭
B-10	小川 宏明	OGAWA	Hiroaki	私立文京学院大学女子高等学校	教諭
B-11	小椋 ももこ	OGURA	Momoko	福島県立ふたば未来学園高等学校	教諭
B-12	杉谷 輝	SUGITANI	Hikaru	佐賀県立佐賀農業高等学校	教諭
B-13	當麻 進仁	TAIMA	Nobuhito	青森県立青森高等学校	教諭
B-14	高橋 和希	TAKAHASHI	Kazuki	池田町立池田中学校	教諭
B-15	高橋 俊輔	TAKAHASHI	Shunsuke	千葉県立印旛特別支援学校	教諭
B-16	高畑 啓一	TAKAHATA	Keiichi	筑波大学附属坂戸高等学校	教諭
B-17	田中 俊介	TANAKA	Shunsuke	MIHO美学院中等教育学校	教諭
B-18	徳橋 佑哉	TOKUHASHI	Yuya	高知県立幡多農業高等学校	教諭
B-19	友光 里恵	TOMOMITSU	Rie	さいたま市立美園中学校	教諭
B-20	津山 直樹	TSUYAMA	Naoki	東京学芸大学附属国際中等教育学校	教諭
B-21	吉川 守	YOSHIKAWA	Mamoru	奈良市教育委員会	指導主事
B-22	湯藤 俊吾	YUTO	Shungo	愛知県立千種高等学校	教諭

2. 文部科学省同行(1名)

B-23	久芳 全晴	KUBA	Masaharu	文部科学省	地方教育行政専門官
------	-------	------	----------	-------	-----------

3. 主催者(国際連合大学)(1名)

B-24	古田 知美	FURUTA	Tomomi	国際連合大学サステナビリティ高等研究所	事務局長
------	-------	--------	--------	---------------------	------

4. 事務局(公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター)(1名)

B-25	河口 枝里子	KAWAGUCHI	Eriko	公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター	人物交流部
------	--------	-----------	-------	----------------------	-------

関係機関連絡先 (2017 年 7 月現在)

1. 全体プログラム

◆ユネスコ国内委員会/Korean National Commission for UNESCO

ユネスコスクールチーム Division of UNESCO Associated Schools

住所: 26 Myeongdong-gil(UNESCO Road), Jung-gu, Seoul 100-810 Korea

URL: <http://www.unesco.or.kr/>

Tel: +82-2-6958-4138/4282 / Fax: +82-2-6958-4250

E-Mail : unescoteacher@unesco.or.kr

事務総長 Secretary-General キム・グァンホ Mr. KIM Kwangho

ユネスコスクールチーム長 Director / Division of UNESCO Associated Schools

ソン・ジョンジン Mr. SONG Jongjin

ユネスコスクールチーム担当者 Programme Officer / Division of UNESCO Associated Schools

イム・シヨン Dr. Cindy RIM

◆韓国教育部/Ministry of Education

住所: Central Government Complex, 209 Sejeong, 408 Galme-ro, Sejong 339-012, Korea

URL: <http://www.moe.go.kr>

Tel: 82(0)2 6222 6060/ Fax: 82(0)2 2100 6133

2. グループプログラム受入れ教育庁

◆忠清北道教育庁/ Chungcheongbuk-do Office of Education

住所: Cheongnam-ro 1929 (sannam-dong 4-11) Seowon-gu, chenghju-si. chungbuk-do, Korea

URL: www.cbe.go.kr /

Tel: +82-43-290-2000 /Fax: +82-43-290-2741

教育長/Superintendent : キム・ビョンウ Mr. KIM Byeong-Woo

プログラム担当/Programme Coordinator : ノ・ジヒ Ms. NOH Jihee

◆大邱広域市教育庁/ Daegu Metropolitan Office Of Education

住所: Daegu Suseong-gu, Suseong-ro76-gil, 11, 42123, Korea

URL: www.dge.go.kr

Tel: +82-53-231-0000/Fax: +82-53-757-8100

教育長/Superintendent : ウ・トンギ /Mr. WOO Tong Ki

プログラム担当/Programme Coordinator : イ・ジェハク /Mr. LEE Jae hak

3. 受入れ校

◆安川小学校 Ancheon Elementary School

住所: 69-16, Hannae-ro, Geumcheon-gu, Seoul, Korea
Tel: +82-02-894-0858/Fax: +82-02-809-8156

校長/Principal : イ・チュンヒ Ms. LEE Choon-hee

プログラム担当/Programme Coordinator : イム・ジェミン Mr. YIM Jae-min

◆陽青中学校/ Yangchung Middle School

住所: 5, Yangchung Taekji 3-gil, Ochang-eup, Cheongwon-gu, Chengju-si, Chungcheongbuk-do, Korea
Tel: +82-043-241-0062/Fax: +82-043-241-0065

校長/Principal : キム・ドンヨン Mr. KIM Dong-young

プログラム担当/Programme Coordinator : イ・ファヨン Ms. LEE Hwa-young

◆陽青高等学校/Yangcheong High school

住所: 33, street 6th, Yangcheong Ochang eup, Cheongju city, Chungbuk province, Korea
Tel: +82-043-717-8800 /Fax: +82-043-717-8899

校長/Principal : キム・ウンシク Mr. KIM Eun-sik

プログラム担当/Programme Coordinator : チャン・ジェヨン Ms. JANG Jae-yong

◆善一女子中学校/ Sunil Girls middle School

住所: 29-27, Galhyeon-ro, Eunpyeong-gu, Seoul, Korea
Tel: +82-02-355-0161/Fax: +82-02-355-9558

校長/Principal : ヤン・スンハ Mr. YANG Seung-ha

プログラム担当/Programme Coordinator : チェ・ソンヨン Mr. CHAI Song-yong

◆源花女子高等学校/ Wonhwa Girls' High School

住所: 30, Dangsang-ro 30 gil, Dalseo-gu, Daegu City, Korea (ZIP:42655)
Tel: +82-053-235-7100/Fax: +82-053-652-4042

校長/Principal : イ・ウク Mr. LEE Wook

プログラム担当/Programme Coordinator : イ・ジュンホ Mr. YI Junho

◆世明学校/ Semyung school

住所: 62, Saebang-ro (Yongsan-dong), Dalseo-gu, Daegu, Korea
Tel: +82-053-231-9560/Fax: +82-053-585-2575

校長/Principal : パク・チョルジン Mr. PARK ChulJin

プログラム担当/Programme Coordinator : イ・ウンスク Mr. LEE EunSuk

プログラム実績

実施期間	訪問地	訪問人数
2003 年 3 月 16 日～20 日	ソウル、慶州、釜山	11 名
2004 年 6 月 13 日～18 日	ソウル、慶州、釜山	16 名
2005 年 9 月 5 日～13 日	ソウル、慶州、釜山	24 名
2006 年 6 月 11 日～18 日	ソウル、光州、釜山	25 名
2007 年 6 月 10 日～17 日	ソウル、大田、清州、慶州、釜山	29 名
2008 年 8 月 19 日～28 日	ソウル、慶州、釜山	52 名
2009 年 8 月 26 日～9 月 4 日	ソウル、統営、安東、釜山	53 名
2010 年 8 月 25 日～9 月 3 日	ソウル、原州、清州、釜山	53 名
2011 年 8 月 26 日～9 月 4 日	ソウル、昌原、順天、慶州、釜山	53 名
2012 年 8 月 29 日～9 月 7 日	ソウル、水原、大田、論山、公州、釜山	53 名
2013 年 8 月 22 日～8 月 29 日	ソウル、清州、春川、原州	50 名
2014 年 8 月 26 日～9 月 1 日	ソウル、春川、楊口、高城、清州、忠州、丹陽	50 名
2015 年 8 月 25 日～8 月 31 日	ソウル、全羅南道、京畿道、釜山	50 名
2016 年 7 月 12 日～7 月 18 日	ソウル、慶尚北道、仁川、釜山	48 名
2017 年 7 月 11 日～7 月 17 日	ソウル、忠清北道、大邱、仁川	49 名
		計 616 名

●国際連合大学 2016-2017 年国際教育交流事業●

韓国政府日本教職員招へいプログラム

実施報告書

2017 年 9 月

編集・発行

国際連合大学

〒150-8925

東京都渋谷区神宮前 5-53-70

URL <http://jp.unu.edu/>

公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター

〒162-8484

東京都新宿区袋町 6 日本出版会館

電話 (03) 3269-4498

URL <http://www.accu.or.jp>

Printed in Japan by WACO Inc. [200]

©2017 Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO (ACCU)